

イ
ソ
ツ
プ
物
語

脚 色	原 作
吉 野 摩 訶	牧 野 大 誓

■三幕

- 第一幕 船着場の市場通り（参道の入口）
- 第二幕 運勢占屋の家の前（参道の中程）
- 第三幕 デルフィ神殿前の広場

■時代

紀元前七世紀後半頃

■場所

古代ギリシャ、フォキス・ポリス（地区）^①

■登場人物

- イソップ 醜いびつこの奴隷。左下肢を骨折した四十過ぎの男。長年の労苦で穢く、やぶ睨みの詩人。
- ロドーピス 女奴隷の舞姫（ロドピス）。三十半ばの筈だが、年齢不詳の妖艶な才女。イソップと奴隷朋輩で、広く慕われた高名なヘタイラ^②。
- アイドン 日本で謂う運勢占い師。神託判断が商売。五十代。
- イアドモン サモス人。五十位。奴隷三千人を所有。金になるものは全て扱う貿易商。ベニスの商人シャイロックが如き風態。
- 奴隷頭 イアドモンの部下四十位。商魂逞しい。
- 一等禰宜 デルフィ神殿の一級神官、四十五、六才。神殿の非役員管理職。常時、聖職用の長い黒ガウンを着用。烏か、狼の如き風態。
- 執政長官 アントニオン。フォキス・ポリス最高執政長官、デルフィ神殿長官を兼務。白髪の平原党長老。六十前後。
- ピュテシア 右長女。神殿枢密女官^③。二十七、八才。ピュテシア大祭を主催しており詩歌に造詣が深い。イソップのパトロン。
- エデホース ロドス国^④・ポリスの元執政長官で一城の主（大老）。五十才位の奴隷。貫禄品位備わり、勇壮で謙譲。
- スイ・レン 右エデホースの娘。十六才。ロドーピス配下の奴隷舞姫。
- 舞妓二人 スイ・レンを姉と慕う奴隷舞妓。十四、五才。
- 執事長 デルフィ神殿の執行役員。小太りの五十男。

●山地党長老 農民、労働者の盟主で野心旺盛な豪族。五十半ば。

○同隊長 青年の隊長。三十半ば。

○同兵士 二人。

●海岸党長老 商人や職工を束ねる、実業家の船乗り。四十半ば。

○同小隊長 青年の小隊長。三十前後。

●平原党兵士 大隊長、前衛隊長、兵士等はデルフィ神殿衛兵、長官の護衛兵を兼ねる。

十二人（二幕）山地党Ⅱ緑、海岸党Ⅱ黄、平原党Ⅱ白等、腕章の色で区別。共通の兵士服。

●悪童たち 三人（一、二幕）。

●神託判断人 三人（三幕）。

●その他

○自由民 老人・地主・百姓、商人、各一人。

○巡礼 六、七人（民族衣装）。風や砂、日照を防ぐ為、共通に頭から襟首にかけて被り物。眼だけ出ている旅姿。

○役人 運上所_ニに一人（二幕）。

○露店商 二人（一、三幕で風態を変える）。

○茶屋の女 一人（二幕）。

○商品奴隸 五人（二幕）。

○使役奴隸 イアドモン配下小頭二人を含み三人（二幕）。

■本文中記号凡例

●場

○景

◎舞台情景

@各要素

以上

- ㉒ デルファイ神殿↓パルナツソス山の古代ギリシヤ神託所。ガイア↓ピュートーン↓アポロンと、
 神格変遷する。詩歌劇・音楽の競技。ピュティア大祭を主催。司祭の呼称はピュートーン由来。
 ㉓ フォキス・ポリス↓デルファイ神殿の経済力が及ぶ行政地。牧歌的な地域で城砦は無い。
 ㉔ ヘタイラー↓古代ギリシヤ高級娼婦。教養を備え特定高官が対象の為、各ポリスの諜報を兼務。
 ㉕ ロドーピスはシンデレラ物語『ロドピスの靴』のモデルである。
 ㉖ 枢密女官↓巫女から出た神託を詩や韻文に現して告げる司祭。
 ㉗ ロドス国↓ギリシヤ人が入殖したエーゲ海東南端のロード島。複数ポリスが存在し、島全体
 で緩い連邦制国家を形成している。アナトリア沿岸故に、東西から影響を受けやすい地勢。
 ㉘ 平原党↓貴族地主（既存支配層） 海岸党↓商工業者（実業家層） 山地党↓農民労働者（貧乏
 市民層）、古代民主制の三大派閥である。
 ㉙ 運上所↓税関&入管、出入物資・出入国者の取締と徴税を行う。

『イソップ物語』梗概

◎時代・場所 紀元前七世紀後半頃、古代ギリシャのフォキス・ポリス（地区）。

@主要人物 詩人イソップと、舞姫ロドーピス（ロドピス）。

■第一幕 『船着場の市場通り』

競売でロドス国元大老が売られる。脚を折った晒し者奴隷は売れ残り、邪魔者扱い、奴隷頭が占屋アイドンに押付けようとする。元大老は知合いの晒し者へ姫スイ・レンの消息を託す。山地、海岸の長老、禰宜、イアドモンはフォキス政権奪取の計略を巡らす。ロドピス舞姫一座が帰着、イソップに気付く。事を了解しイアドモンから借り受け、アイドンに保護を依頼する中、スイ・レンに気付いたイソップが、父の消息を伝える。

■第二幕 『運勢占屋の家の前』

悪童に寓話を語るイソップは、美と清を称える一方で、自身の醜穢を愚痴る。アイドンがイソップを判断人に誘い、自分を身請けし、自由民になる事を勧める。

禰宜はイソップの詩歌を否定、奴隷を批判するが、ロドピスの任官説得を依頼する。その過程で神殿神託が氏神アポロンではなく、先住民の言葉であると、理を明かす。山地党の援兵依頼で山地党海岸党の結託が露見する。司祭ピュティアの神託で出兵が決まり戦争準備が始まる。ピュティアがイソップに新作を求め、対してホメロス詩篇の写本を提供する。イソップはホメロスを一読のち、神託判断を手伝う決意を固める。

■第三幕 『デルフィ神殿前の広場』

戦勝祝賀会の日、アイドンの判断所はイソップの評判で繁盛。あおりを喰った判断人の恨みを買った騒ぎが発生。イソップを危険視した禰宜は、陥れるため判断人へ教唆する。本隊凱旋でエデホースが褒賞され、スイレンと再会を果たす。一方、イソップの詩作を知る周囲が、皆でその創作意欲に油を注ぎ、イソップは自由民になる希望に溢れる。イソップ、判断人たちに禰宜から聞いた神託の謂れを語る。それを聞いた禰宜の誘導尋問に嵌る。異教徒と断罪され、禰宜の神託で槍処刑に、奴隷墓地へ曳立てられる。ピュティアがその神託を偽と断罪、イソップの刑執行停止を命じ、衛兵が救援に走る。執政長官は禰宜を解職、国外追放に処す。禰宜はイアドモンの船に逃亡する。

執行停止が間に合わず、一番槍の入った手負いイソップが連れ戻される。ニセ神託と知り、禰宜を追いかけようとするが、怒りと絶望の中、念願の長編を書きかけ力尽きる。

以上

■ 第一幕 古代ギリシャのフォキス・ポリス（地区）

『船着場の市場通り』

◎場所・デルフィ神殿への参道入口

@時は早春。遠景は熱海を海から眺めるに近しいが、数十倍雄大で背後に連峰がある。右上部に小さく、デルフィ神殿らしきもの（当地からは神殿まで十キロ）が見える。そこに通ずる参道が、森や山麓にさえぎられ、見え隠れにうねうねと通じている。

@遠景の山は山裾から二分一位までが緩い斜面。オリーブ、ブドウ園等と、畑や羊の牧場がある。その合間に富豪の邸宅、小地主、百姓の家が点在し、のどかな風景。

左手前の山と背後の山間に深い谷があり一条の白道が通ずる。これがフォキス地区の山岳高原地帯への道である。

@市場通りは下手に、船着場への朽ちた案内札がある。札の右に古風な倉庫、その隣に茶屋が縁台を並べる。次が運上所で役人が役務中、その角から奥へが山岳高原地帯への脇道。道を隔て、青草の小さな広場（巡礼が天幕を張り、一夜の宿をとる処）になる。色褪せた天幕が二つ。巡礼がそぞろ参道へ向う支度を始める。

@青草広場の右に、運勢占屋の掛小屋がある。

大きな、こけ威かしの看板、

『だまって立てば、ぴたりと当てる！』

御神託判断所 宇宙屋 主人 』

青草の広場にも札が立つ、

『御神殿の御供物 生贄の山羊

一匹 十二ドラグマ。』

金持ちの巡礼はこれを買っていく。貧乏人はお菓子、果物などを。国王や大富豪は、高価な宝物を持参している。

@続き、参道口にかけて露天商が二軒、むじろ蕙の上に品物を並べ、土産物や供物を売る。古風で淋し気、すゝけた風情。

上手に向かい緩い上り坂で、デルフィ神殿への参道入り口となる。

『デルフィ神殿参道』 と、大きな柱が立つ。

@市場通り中央の競売台

運上所前、横の山道へ入る角に奴隸の競売台がある。その前に男の奴隸が一人晒し者。手で頭を抱え横倒れになる。頭髮は乱れ醜男。片袖のとれたよれよれの奴隸服に縄の帯。左の下肢は骨が折れ、木片を当てる。穢い包帯をぐるぐる巻いて、芥の如き風態。

■開幕

—銅鑼の激しい音—

●奴隸競売台上、豪商イアドモンの奴隸頭が、奴隸競売の最中。色々な人物がこれを取巻き、競ったり冷かす。景気がよい。

奴隸頭 「さあ、こんどはご覧の通り、コブ付き美人じゃあ！なあお客さまよ、よう見ながら値段つけとくれよお。さあいくぞ、いくらだあ、なんぼやああ」

競売台の女奴隸は、娘を連れる。

好色の老人 「ふうむ、五〇ドラグマ」

奴隸頭 「なんじゃ？五〇と？たった五〇か、ふゝ、まあえゝ、ねばるとしようか。

さあ五〇ときたあ……五〇、五〇、五〇ドラグマあ」

魚市場の如く、賑やかに値を競り返す。

地主 「六〇、六〇ドラグマ」

奴隸頭 「それ、その調子、ほいきた六〇、六〇なり！」

好色の老人 「七〇、七〇じゃ！」

奴隸頭 「ほい、七〇ときたわな。よく見とくれ。お母あは、家事手伝い、果樹園、羊の世話、何でも出来るぞお。おいよう聞けよ、こゝが大事などこじやて。寢室の秘書官としても使える。その上おまげが一つ付いてるとくらあ。この娘があと二、三年もしたら、ほい一人前じやて。今が買いい時、今が買いい時、それ七〇じゃあ、まだ安い、まあだ安い！」

百姓 「七五、七五じゃ」

奴隸頭 「七〇と五、七〇と五、七十五ときたわ」

地主 「八〇」

奴隸頭 「八〇、八〇、八〇なり、八〇なりい」

好色の老人 「九〇」

奴隷頭 「おお九〇、九〇、九〇ときたぞ」

百姓 「九〇と一つ」

奴隷頭 「なんじゃ九〇と一つ？ たった一ドラグマ上げたあ、かなあんなあ。このフオキスは裕福な旦那さんばかりと聞いてきたがのう。けちけちせんでええ、ほいきた、九〇と一つ、九〇と一つ」

地主 「九〇と五、九〇と五じゃ」

奴隷頭 「ありや、また四上げかよ。頼む、十単位でしてくれ。ほいきた、何ぼじゃ」

百姓 「九〇と六じゃ」

奴隷頭 「あゝあゝあ、いやはや、かなあん、また一上げか。なあ、其処そこなお客さま、助けてくれよ」

好色の老人 「一〇〇だああ！」

奴隷頭 「ほいきた、さあのみさ。有難い、一〇〇ときたぞお」

地主 「一〇〇と五じゃ」

奴隷頭 「それ一〇〇と五、一〇〇と五」

好色の老人 「一〇〇と一〇じゃ」

奴隷頭 「一〇〇と一〇、一〇〇と一〇、一〇〇と一〇じゃ」

(見物人、声なし)

奴隷頭 「おや、声がない。なんたるこっちゃやっあ、この肉体美人がああ、たったの一〇〇と一〇かよ。もう一と声、もう一と声え！」

(呼び、手を叩き耳を澄ます)

奴隷頭 「えゝい、売っちまえ！」

と、引き渡す。件の老人が金を払い、コブ付を連れて上手参道へ消える。

◎情景

奴隷が売れる度び、銅鑼がじゃんじゃん鳴る。

@競売の補助役が二人。イアドモン使役奴隷の小頭一人、銅鑼を叩き競売奴隷を台へ上げる(競り待ち奴隷は倉庫前に並んでしゃがむ)。もう一人の小頭は、運上所の前に陣取り、代金を領収。運上所の役人と一緒に帳付けをする。山地党の隊長と、海岸党の小隊長は競売台前、買手の輪にいる。

@茶屋の店先に山地党の兵が一人控える。山地党の長老も中にいるらしいが、まだ、

姿を見せない。買取られた奴隷が、店先きにしゃがんで並ぶ。

@倉庫、大きく口を開くが暗く見通せない。デルフィ神殿一等禰宜は入り口付近で、物陰の誰かと、ひそひそ話をしながら競売の様子を気にする。イアドモンらしき罵声、時折り奥から聞えてくるが、これも姿は見せない。

@一方、広場の巡礼たちは天幕をたゝみ、露天商を冷やかしながら、競売を見物する。夫々いつの間にか参道を登り消える。その度に、運勢占屋アイドンが小屋から出てきて、神殿の参詣案内をする。

○次の競売は、痩せたひよろひよろの青年奴隷。

奴隷頭 「ほい、お次ぎの番だよ、青瓢箪。其処なお客さまよ、見かけは悪いが、たゞ青瓢箪ではござらん。もつとも、船乗りや道造りみたいな荒仕事は出けんが、他人様には出きん腕を持つとるぞお。便所の汲取りや、ゴミための掃除は、天才でござる。その道かけては、第一人者という腕の持主だ。このご仁をお買い求めなれば、便所もゴミ溜めも何時もきれいというわけじゃ。さあ、公衆衛生家あ、公衆衛生家は、どうじゃあ」

地主 「二オポロス」

奴隷頭 「あんじゃと？も、も一度言ってくれ。二オポロス？そりや、陪審官さまの日当じゃで。お客さま、かんべんしてくれよお。さあ、いくらじゃ」

商人 「三オポロス、三オポロス」

奴隷頭 「三？あ三たあ、鶏三羽分だよ。よく見て、人間様ですぞ。万物の霊長人間さまが、三オポロスたあ情けねえ。あゝあ情けねえ。さあ、氣い取り直して、気張っておくれえ。さあ、いくらだ、いくらだああ」

地主 「五オポロス、それ以上にはならんぞお、五オポロス」

奴隷頭 「はい、分かり申うした、五オポロス、五オポロス、五オポロス」

商人 「六だ、六オポロスじゃ」

奴隷頭 「六、六、六オポロス」

百姓 「ほつ、七オポロス」

奴隷頭 「ほい、七オポロス、まあ一上げ。わしゃ泣きたい。さあいくらだあ」

商人 「八オポロス」

奴隷頭 「かなあんなあ、またちびちびと。なあ、よう見さつしやい。ご覧の通り、眼もありや、鼻もある、口もあれば、両手両足五体揃った人間さまですぞ。

それをたった八オポロスたあ船乗りの日当じゃねえか。先程もいった通り、公衆衛生家。便所掃除の天才じゃぞ。十単位で上げてくだされよ。お客さま、頼みますぞお、これ、この通りじゃ」

合掌し、三方礼。

百姓 「うわっはは、よしっ、今度はわしが奮発してやる。一五、一五オポロス
 どうじゃ！」

奴隷頭 「やれやれ、やっと一五になったわ。其処なお客さま、有難いぞお、さあ、この調子でえ、それっ、一五、一五、一五オポロス」

商人 「一七オポロス」

奴隷頭 「一七、一七、一七オポロス」

百姓 「二〇オポロス」

奴隷頭 「二〇、二〇、二〇オポロス」

商人 「二三オポロス」

奴隷頭 「二三、二三、二三じゃ」

百姓 「二〇と五、二五オポロス」

奴隷頭 「有難いぞ、二〇と五、二五、二五オポロス」

(しばらく頭を垂れ、待つ)

奴隷頭 「うん？声がかゝらんなあ。もう一と声、も一と声と、どうじゃ。お客さま、あと一と声、一と声でえ、じゃ」

(声が掛からない)

奴隷頭 「ないか、もうないか？あえ、い、清水の舞台から飛んぢまえ。へい、お有

難うございます」

青瓢箪を百姓に引渡す。銅鑼がじゃんじゃん鳴る。

百姓は金を支払い、青瓢箪を連れ中央横道へ消える。競売補助の奴隷小頭、次の奴隷を競売台へ上げる。

○体格のよい、如何にも元兵士という奴隷、

奴隷頭 「さあ、今度は青瓢箪と違うぞ。ご覧の通り精悍なエジプト生まれの勇士。

力は二十人力、槍の名人なりい」

(ここより、講談口調)

奴隷頭 「過ぐる先年、バビロンの大王ネブカドネザル二世、五万の大軍をもって、

どつとばかりにエジプトへ攻め込んだり。その時、長槍をわしづかみすると、栗毛の愛馬にうち跨り、我に続けと大音声、呼ばわり呼わばりバビロン軍の真つたゞ中へ馬を乗り入れたりい。当るを幸い、群がる敵兵をなぎ倒しなき倒し、田楽刺しに刺しまくり、はっしはっしとを先途と戦つたり。敵を芋刺しにすること一百と三人なり。時に利あらずエジプト軍は破れたあ……この男、深手を負つて倒れていたところ、あゝ天や無情、悲しいかな、敵に捕えられ、捕虜となつたあ。

そして、わしの処へ売られてきた。わしんどこも手放しとうないんだが、うちは商売じゃ。このたび、お客さまのご要望で連れ参つた。高値でないと売らんからなあ！

さあよおくご覧の上、値段をつけておくれ。そこにもある、こゝにもあるという代物ではあござらん。

さあいくぞ、いくらじゃ、いくらじゃあ

山地党の長老が茶屋から出てきて、隊長に耳打ち。

山地党の隊長が競り声を掛け、海岸党の小隊長と競り合いになる。

山地党隊長 「一〇〇、一〇〇ドラグマ」

奴隷頭 「一〇〇じゃな。有難いその調子でえ、一〇〇ドラグマ、一〇〇ドラグマ、一〇〇ドラグマ」

海岸小隊長 「一〇〇と二〇」

山地党隊長 「一〇〇と三〇」

奴隷頭 「ほいきた、一〇〇と三〇、一〇〇と三〇なり」

巡礼の金持 「一〇〇と五〇なり」

奴隷頭 「ほいきたその調子、一〇〇と五〇、一〇〇と五〇なり」

山地党隊長 「一〇〇と六〇、一〇〇と六〇」

海岸小隊長 「一〇〇と六五」

巡礼の金持 「一〇〇と七〇」

山地党隊長 「一〇〇と八〇」

奴隷頭 「一〇〇と八〇、一〇〇と八〇なり」

景気よく競り上り、二〇〇で山地党が落札。銅鑼が鳴る。次にエデホースが競売台に上げられる。

○他奴隸と同じ奴隸服で裸足だが、その貫禄は並びなく、立居振舞に品位がある。

奴隸頭 「ああいゝか、今度は、ちいと大物じゃぞ。初めっから言っとくが、絶対に！

安値では取引せん」

(声を張上げ、続き講談調)

奴隸頭 「去る四年、ジュダヤ^三に攻め入られたロドス国の悲劇、お客さまもよく、ご存知の通りじゃ。

ロドス国ご大老、一城の主であつたがこのお仁。ご大老は臣民を助けんと、戦いを避け捕虜となつた。となれば奴隸、一家は散り散りに売られた。

あゝ人の運命や如何、明日のことは分らぬものじゃ。お客さまよ、一城の主が今日は売られていく奴隸じゃ。やいやい、よおくご覧じろ。普段、どうしてこうして下人どもは、そう御尊顔を賜われぬお仁じゃ。縁あつて、わしとこの親方イアドモン様が買取られ、このたび当地へお連れ申した次第よ。

それ三軍指揮すればその力、無類。これ以上、またとあるうか。金無しは買わんでよい。元は一城の主よ。これ程のお仁ならば、どこへいっても高値で売れるわあ。

さあいくぞ、いくらだ、いくらだあ！」

山地党の長老、隊長の肩を叩く、

山地党隊長 「三〇〇！」

奴隸頭 「そうこなくつちやならんわい。さあ三〇〇ときたぞ。それ三〇〇、三〇〇、三〇〇！」

(声なし)

奴隸頭 「んだあ？しんとして。ん？さよ遠慮せんと、売り買いじゃからなあ。我と思わん者は、さあ、大声でえ、さあいくらだあ！」

(しんとして)

奴隸頭 「あつきれた。皆んな金がないんか。たった三〇〇だよ一城の主が三〇〇で買えるんよ。よう見てくれ、この貫禄を。千両の値打もんじやろ。立派なんだろうが。さあもう一と声、いくらだあ！」

(依然声なし)

奴隸頭 「ふう！よわたたなあ、じゃあこうしよう、あと一と声で落とすとしよう。

さあいくぞ、三〇〇、三〇〇、三〇〇、あと一と声、それ、いくらだああ！」

大声で呼ぶるが、またしんとして声なし。

奴隷頭ついに諦め、山地党の長老へ向い、

奴隷頭 「其処な山地党の旦那さま、もう五〇、あと五〇、奮発してくださいませんか。

そうすりゃ引渡しますじゃ」

山地党長老 「あゝ、分った」

奴隷頭 「よしつ、決まった。えゝか皆さん、この旦那さまにお渡ししても、文句あ

るまいよなあ、あん？よしつ！それでは皆さま、お手を拝借願えますか……

さあよろしいか、はいっ！」

奴隷頭が音頭を取り、運上所、茶屋、倉庫からもぞろぞろ出てくる。

日本の大鷲神社の熊手売りよろしく、しゃんしゃん締める。

奴隷頭 「やあ、有難うございました。今日の競売りはこれで終わります。お立合の皆

さま、お有難うございました。有難うございましたああ」

●見物人が散りかゝる。奴隷頭、慌て競売台から飛び降り、晒し者奴隷の衿首をつかまえて引起す。

奴隷頭 「皆の衆、これも売り物んじゃ。買ってくれんか。安くしとくぞ。ちよい怪

我しとるが、一人前じゃ。ご覧ん通り顔はまずい、う！まずい。それ醜女の

深情けというでな。おつと、間違つた男、男。山羊二匹分でどうじゃ、さあ、

いくらだ、いくらだあ」

人々、じろり眺めるが、取り合わない、

奴隷頭 「売れんか、二日目？だな。これじゃ何日かゝつても売れめえ。おい、売れ

るまでこゝで寝とれ。くそつ、何も喰わさんぞ」

晒し者奴隷は、折れた脚を曳き、這いづり、誰れ彼れなしに哀願、

晒し者奴隷 「のう、お客さま、わしを買って下され。わしを買ってくださいませ。どん

な仕事でもいたします故に」

見物人の裾にすがりつき廻る。誰もが逃げ散り、相手にしない。晒し者奴隷はやがて、両手を挙げ天を仰ぎつ、大地に泣き伏す。

○イアドモン、唼鳴り乍ら倉庫から出てくる。

イアドモン 「こ奴つ、また売れ残ったかつ！」

奴隷頭 「はい、ご覧通りで。残りました」

イアドモン 「ちいとばかり脚がどうのと、売り物にならぬとは、このくそつ、どうしてくれる！」

(蹴り跳ばし、踏みつける)

イアドモン 「売れるまで飯喰わすな。此処こゝなごくつぶしめっ」

(暫し考えて)

イアドモン 「さりとて、何時までもこゝら置くわけいかんしのお、忌々しい。ああこ奴、

誰れぞに、くれてやれい」

○そこへアイドン、巡礼の案内に、小屋からひよるひよる、

奴隷頭 「あ、其処な占屋さん、これ、引取ってくれんか」

アイドン 「この方、脚が折れてはるんやろ。引取ってどうします？」

奴隷頭 「そう言いなさんな。こゝ置いとくわけにもいかんで。市場通りじゃけん、邪魔になるし、みつともないで。相談じゃが、買取るがやなら、暫く預ってもらえんか。治療代賄料は出す。ご覧通りわしら、遠くからきた商人での、船で寝泊まりしておる。あ奴の治療もしてやれん始末さ。ところで、わしのご主人様と申すはなあ。サモス島の富豪、大金持ち様じゃ。」

(これが始ると、イアドモン、傲然とふんぞり返る)

奴隷頭 「噂にも聞いてご存知あろうが、奴隷は何時も手許に、三千人。奴隷売買もなさるが、それはごく一部で、本職は大貿易商じゃ。東はバビロン・シリア、南はエジプト・テーベ、西はアドリア海からイタリヤチレニア海岸の殖民地、北はお隣りテッサリアから、その奥、野蕃国マケドニヤマ、エピルスといった田舎の田舎まで、全世界股にかけてご商売をしてござらっしゃる。持船大小合わせ五十艘。今回も大船一杯に、武器だ、織物だ、香料だのと、どっさり積込んで商売にきた次第じゃ。それが、コリントでチャリオットマ下ろす時によ、ロープが切れて、どすんと落ちたと思いなされ。合憎、あ奴がその下におつて、脚を、ちよいと折ったという訳じゃ。どうじゃ相談に乗らんか占屋さん。預るのがいやなら買ってくれんか。こゝは安くしとくじゃ。青瓢箪の五分の一、鶏五羽分五オポロスに見切つていゝ。一と月も治療すりゃあ、五〇ドラグマで売れる。あれこれ差引いても四〇ドラグマ位の儲けになるさ。どうじゃ、いゝ商売じゃないかよ」

アイドン 「いやいやイアドモン様のこと、よう存じとりますが、わしや奴隷の持てる

身分ではありません。しがたい運勢占屋の、その日暮らしてございますから」
 奴隷頭 「いやそれでもなかるう。あんただって山羊の一匹や二匹飼っておろうが。

こ奴は山羊飼いの名人じゃ。何処ん国の自由民でも奴隷の一人や二人持たぬものがあるかいな。なにしろ奴隷というものは便利なもんでなあ。ほりや、小麦から野菜作り、果樹園の世話、鍛冶屋もやれば水車小屋の番人もする。生産は一切合切奴隷がやってくれるんじゃ。だからなあ、奴隷一人おれば、あんたは遊んで食べるっていう訳さ。ケチケチしなさんな。こ奴買って働かせとけば、あとは懐手じゃ。どう、どうじゃ鶏四羽分にしとくがなあ」

アイドン 「滅相もな！堪忍ですわ。わたしや奴隷の苦しみを、見ちゃおれん。奴隷を持つことは、罪を作ること。お断りっお断り！」

自分の小屋へ、飛んで逃げる。

奴隷頭 「ちっ！奴隷を持つことは、罪を作る？ひねくれ者め！んなことで世の中が渡れるか、阿呆ったら！」

●腹立ち紛れ、倉庫の使役奴隷に、

奴隷頭 「やい其処な奴ら、何ボヤボヤ。山地党と海岸党の旦那様方に、早よう槍や楯をお目につけないかっ！」

声に応じて、使役奴隷三人が長槍や短槍を持出し、倉庫から市場通り中央へ駆け抜け、りゅうりゅうと素振り。『やあ、おう』と掛声勇ましく飛跳ねる。海岸党の長老も倉庫から出て、小隊長と見物する。

奴隷頭 「ご覧の通り。何にしろ実戦に使ったものばかりですので、品質は保証済。バビロンは、何千人という重装歩兵がこの長槍を密集させて突入してくる。その凄まじいこと勇ましいこと。一隊、二隊、後詰めが次々と突込んでくる。たまったものではござらん。ジュダヤ国がやられたのも、この手でございましてからな。どなたかお一人、試していたゞけませんか」

○山地党長老が茶屋から出て隊長に合図。隊長は先刻買取った『槍の名人』という、精悍な奴隷に命令する。

山地党隊長 「お前、一つ試してくれ。腕に覚えがある筈じゃ」

奴隷、長槍を取り、芯を確認するように、慎重に振り回す。
 適宜、的を作り突く。その度に的が割れ落ちる。賞賛の声、

(見物人) 「うお!」「凄い」

(見物人) 「なんと」「神技」

山地党長老 「うむ、仲々やりおる。ああ!それ位でよいぞ」

その奴隸、槍を返し自席へ戻り汗を拭く。この間一語もない。

奴隸頭 「あゝ、しまったことを。かほどの槍名手を、たった二〇〇で売ってしもて。

山地党の旦那さま、もっと値を上げてくだされよ」

山地党長老 「ばか申すな。遅いわ!」

手を振り、取り合わない。

奴隸頭 「こいつぁ、不覚でござった」

頭を掻きながら、倉庫の入り口へと歩く。

山地党の長老、槍使いの奴隸の肩を叩き、

山地党長老 「あつばれであった。この調子で大いに働いてくれ。褒美は必ず取らすぞ」

(槍使いの奴隸は、面相を崩して深く頷く)

山地党長老 「のう隊長、こいつはいゝものが入った。そこでだ、わしらんとこは山国ゆ

え木立が多い。長いと振り廻せん。短槍を買っていつてはどうじゃ」

山地党隊長 「仰せの通りでございます。短槍五〇楯五〇、その他弓矢、長剣といったと

ころをと、存じます」

山地党長老 「うむ、よかろう。あとは委す。値は上手くやれ」

山地党の隊長、奴隸頭に向い、

山地党隊長 「みな戦で使ったというが、何処の造りだ?」

奴隸頭 「バビロンの都バクザット^{バビ}で。個々念入りに調製した逸品でございます。

その上、実戦に使用して試験済みでございますから、確かな品です。お値段も新品の半値で結構。近頃の品物はろくなものがありませんでなあ、ぼきぼき折れたりします。戦場で武器が折れちゃあ、万事休す。あつはゝゝ」

この連中、倉庫の中へ、そぞろ入る。

@残された晒し者奴隸は、脚の折れたところが痛むとみえ、時折りうめいたり喘ぎ、頭を抱え込んだりする。

@倉庫の前、武器の値決めが終わった海岸党が、槍や楯など各々十本ばかりを物色、早々と大八車に積込み、下手船着場の方へ曳き込む。

山地党の連中は、奴隷に手伝わせ、目当てを付けた武器を数え始める。

○ひとしきり静かになると、露天商の二人が小屋から出て、占屋の掛小屋へ近づく。
アイドンは小屋から出て、うつ憤をぶちまける。

露天商1 「なんでもいい、世界一、世界一と、自慢しくさりよって。奴らなぞ関わると、ろくなことあらん！塩でも撒いたれやあ」

アイドン 「奴隷をしぼりまくって、太ってるんよ」

露天商2 「ああ、戦争がある度、あいつは焼け太りして戻る。捕虜をひと山なんぼで買い叩いて、競りで高く売りつけやがる。その上、戦場跡にとっちらかった武器を拾い集めて、新品の半値だあ？はっ、笑らかしやがる」

露天商1 「それ、わしも聞いた。ジュダヤとバビロンの大戦時、三十里四方に敵味方の死者数万。ところが三日と聖たんうち、あのイアドモン、手持ちの奴隷、三千人を戦場跡へ繰込ませ、とっ散らかってる武器や盾を拾い集めたと謂うから、驚き入ったよ」

露天商2 「そりやまだえ。まだ呻いている兵の懐を探らせて、小遣錢まで筆り取ったと謂うぞ。あの焼けつく砂漠で、虱つぶしに。兜や脛当て、服から靴までとことん剥ぎ取ったいうから、まるきり追剥さ。やる奴隷は、いゝ迷惑よ」

アイドン 「ちよい手入れして、拾い物を実験ずみの品だとか。血いついた服や靴は、一と洗い繕って、遠く田舎の人に売りつける。それが大喜びで、あつという間に売れるいうから、えゝ商売に違いない。気の小さいわしには出来んが、ああ、ああ、も少し神経見習えたらなあ……」

露天商1 「何いっとる！そんな神経なら、太くならんでえ。世界一の金持ち？んなこと知らんが、鬼畜生、非道極まりない。糞でも喰らえいっ！」

唾を吐き捨てる。

○倉庫の前、下手船着場から戻った大八車へ、武器の積込みが終わるころ、

山地党長老 「先き、戻れ。もう少し話詰めるから、遅れる。一人、残してくれぬか」

山地党隊長 「はゝ。帰着次第、支度にかゝります。ではお先きに」

山地党長老 「おゝ、頼む」

山地党一行は隊長に従い、大八車を奴隷に曳かせ帰途につく。

中央からの横道へ入り、山岳地帯へと登る。山地党の長老はそれを一瞥、倉庫の中へ。従兵一人が茶屋へ入る。

●車が横道へ入った時、その後を押すエデホースが、仲間と兵に一寸断わり引返してくる。競売台下に倒れる、晒し者奴隷の頭そばにしゃがみ込み、

エデホース 「痛むか。今の私は何もしてやれん、勘弁してくれ。今日、また売られた。

こゝで別れたが最後、何時また逢えるか判らん。互い苦しくも我慢するより道はない。奴隷に落ちたらそれまで、一生奴隷だ。何事も運命というもの」

(暫し)

エデホース 「お前が城下に居た時にこんなこと謂うたな。戦争に敗ければ奴隷となる。

独り身は気楽だが一城の主は一族一門縁故係累が多い故、心労も並ではないと、その通りだったよ。みな奴隷に売られ散り散り、今は所在すらわからん」

(涙声)

エデホース 「妻は、慣れぬ仕事に耐えかねてか、三月と圣たず亡くなったと、聞いた」

(晒し者、貰い泣き)

エデホース 「姫は、姫は十二で奴隷。今年十六、どこか立派な国の勇士の許へ嫁入りする頃だ。可哀そうで、可哀そうで」

(二人手を取り、忍び泣く)

エデホース 「むごたらしい仕打ちを受けてはおらんか。牛小屋の藁に包まって、泣きながら寝ておるか、夜も日も思うて」

○横道奥へ入っていった山地党の隊長が戻ってくる。エデホースに向い、

山地党隊長 「おい！何している。皆が待つてるといふのに、こんな奴と。早よ来いっ！

とんでもない奴！」

エデホース 「は、はい申し訳ござりません。お許しを」

(晒し者に向い)

エデホース 「よいか、お互い歯を喰いしばって。もしスイ・レンに逢うことがあれば、

山向うへ売られていったと伝えてくれ。さらば……」

エデホース、思いを残し、隊長に従い中央横道へ入る。

●巡礼二人、上手参道より下向する。晒し者奴隷に侮蔑の色。一人茶屋へ声を掛け、

巡礼1 「渡し船は、まだかいな」

茶屋の女 「はいはい、お疲れさまでえ」

外に出て、陽を仰ぐ、

茶屋の女 「あと半時と謂う所ですかね、コリント通いの渡船が着きます。ごゆるり、

お休みなさいませ」

巡礼 1 「では、ひと休みさせてもらいましょう」

○巡礼 2、運勢占屋の掛小屋の前に立つ。御神託（浅草観音様お御籤のような紙きれ）の判断を乞う。

アイドゥン、手に取って徐ろに^{おろむ}誦上げる。

【富貴天之祐】富貴は天の助けなり

【何須苦心】何ぞ用いん、ねんごろに心をもちいることを

【前程応蹟】ぜんてい、まさにあとをあらわす

【久用得高臨】久しく用いて高臨を得たり

アイドゥン 「これは、このような理です。

- ・ 富んだり位を戴くことは、天の授け。自分の知恵才覚では出来ない。
- ・ 心をつくして苦しむとも、天から授からねば何の甲斐もない。
- ・ よろしいですか。その次ぎは、

・ 行く先の良し悪しは、これまでしたことの良し悪しで決まる。

・ 久しく全をつくせば、位も高く富も得るなり、と。

これは大吉です。あなた、何の願いを伺いに、お越しなされました？」

巡礼 2 「娘が、長いこと病氣しとりまして、そのお願いに、参りました。それと、

イタリヤ殖民地へ行くのが、良いか悪いかと」

アイドゥン 「姫御の病ですね。一と月もすれば癒えます。大丈夫！ご心配ありません。

あと、殖民地へ行かれると……何時行きなされるおつもり？」

巡礼 2 「国にいても、うだつが上がりません。新天地へ行つて一旗揚げたいと思ひまして、直ぐにでも」

アイドゥン 「あなた、コリント奥ですよ？行きなされ行きなはれ。当地にしろコリントにしろ同じこと。上のお方ばかり勝手なことされる、下々は困るばかり。

新天地、よろしいことです。一旗あがります。気張りなされ。吉と出ております。よい機運です」

巡礼 2

「おゝ、行つてよろしいか。有難う。それでは、帰って早速準備を始めます。

あゝ新天地へ行けるかあ、よかったよかった」

○神託の紙きれが風に吹かれ、晒し者奴隷の方へ飛んでゆく。奴隷が拾い読む。巡礼、慌て追いかけて、それを獲る。

●倉庫、中から会合を終えた声。山地党長老、海岸党長老、一等禰宜、イアドモンが、話しながら運上所の前へ出てくる。

山地党長老 「それでは、わしはこれで戻りますが、先刻の通り皆さま、万事ぬかりなく、お頼み申しますぞ」

海岸党長老 「万事ぬかりなく。始められたら、お知らせを。直ちに応援隊を差向けます。その他こちらの連絡は、わたくしめがやりますから。ご心配なく」

山地党長老 「頼もしいお言葉、安心して準備にかゝれます。では、ご一同！」
一礼し、茶屋の従兵を連れ、中央横の山道へ消える。

海岸党の長老は、それを見送り、
海岸党長老 「では、わしらもこれで、ごめん」

と、小隊長を連れ、下手の船着場、海辺へと消える。
禰宜はイアドモンと目くばせ、二人運上所へ消える。

閑散。露天商達は、青草の上で弁当を広げ食いだす。

○イアドモンが運上所より出て、倉庫の奴隷頭に声を掛け、内緒話を始める。

イアドモン 「その辺、誰もおらんか？」

奴隷頭、あたりを見廻し、

奴隷頭 「はい、誰もおりません」

イアドモン 「近寄れ、極く内々の話じゃ。お前も知っておろう。フォキス、アテネ、コリントいずれ同じだが、平原党と海岸党、山地党に分かれとる。平原は地主貴族よ。何十年も支配しとる。海は新興の金持ち、職工や商人だの海辺の者。山は農耕や放牧している山裾の貧乏人、中流の下や。で平原が六〇、海と山、合わせて四〇だった。それが段々くずれかゝつとる。海も、特に山が伸びとるわ。今は平原四〇、海山六〇と勢力逆転よ。でだ、よおく聞けよ。判るか？ 来年、こゝの選挙だ。海と山が、わかるじゃろ」

奴隷頭 「はい、よう分ります。わしも内々」

イアドモン 「で、経済かの裏打ちかがある。ところで隣のマケドニア国境辺りよ。あそこら、岩山で国境なんてものではないが、銀山が見つかったな。野蕃人共がそろそろ

掘出しておる頃。それを山地党が一合戦やって、と、企んだ。一と月もすれば攻め込むぞ。そこに海岸党が乗った訳さ。で奴隷だ武器だ、しこたま買ってくれたという次第さ」

奴隷頭

「ふむ、えらい景気の買いつぷりとは……まあ相手は野蕃国、五、六十人も兵隊を差向けりや、銀山位、山地党でも、わけなく分捕れるでしょうが」

イアドモン

「左様、苦勞なしに押えられるじゃろ。おまけに、貨幣が出来てから、銀はいくらあつても足らんし丁度よい。うまくいくじゃろ。わしも応援する、と言うといたよ。で、だの、執政長官を山地党がとれば、もう占めたものだ。大儲けがあるんじゃ。こつち寄れ」

奴隷頭

「はい！大儲けとは？」

イアドモン

「しっ！声が高い。よう聞け、ええか。このフォキス・ポリス、神殿のおかげで金廻りがよい。執政長官は、神殿長官を兼ねる。実権を握ったらどうなるか、よう考えてみる」

奴隷頭

「なるほどなあ、神殿の実権を握れたら？」

イアドモン

「くそ阿呆だら、まだ気がつかぬか」

奴隷頭

「はい、枢密女官も巫女も、お手盛りが出来ましょう。こゝの枢密女官は、長官の長女だし、巫女は腹心の娘。そこでと、この女官が曲者。巫女がお授けした御神託を人の言葉に直してるのが、この枢密女官。と聞いております。だから、枢密女官の手心一つ、で、御神託はどうにもなる」と

イアドモン

「それよ。女官の手心一つ。どうもなる謂うことはな、世界中のジュダヤを除く、エジプトバビロン他国々。国政や外交、戦争の可否。策戦まで、御神託を受ける。世界を動かしてると同じことよ。おまけに金持から貧乏人まで、いろんな国から、遙々、お詣りに来るさ。それがみんな惜気なく、家宝や犠牲を持って奉納するという次第。だからこゝん奴らは、懐手して遊んで世界中の宝物が手に入る。どうじゃ、巫女の寝言が、大儲けになる。これ以上旨い商売が、他の何処にある？」

奴隷頭

「ああ、ご尤も。わしら、汗水たらして金儲けすると違う。それも懐手……いやはや」

イアドモン

「それだけに神殿の虫けら共、執政長官だろうが、禰宜だろが、木っば役人まで。一皮むけば臭いんだよ。巫女の寝言に、大あぐらかいて。どいつもこ

いつも腐つとる。腐臭がする、臭いんだよ」

奴隸頭 「全く確かに。ところ彼処あしこの一等禰宜、あれは臭う。あんな輩、大事に乗っけて、よいのですか？」

イアドモン

「お！ 匂いついたか。ありや袖の下が好きな奴、神殿の腐敗を知つとるで。最近な、野心家になりおつて『長官を取替えて、俺を執事長にしろ』と謂う。で、海と山が手を握ればそれが出来る。奴あ神殿の動きを逐一報告するとも謂うから、一枚な。山地党長老も海岸党長老も、喜こんで承知したさ」

奴隸頭

「はゝん、奴が言い出しっぺ？ なら確かでしょ。椅子がこつちへ廻るよう、画策するでしょうな」

イアドモン

「そうよく聞け。こつから、こちとらの出番だからな。えゝか、あの神殿の大宝庫、中には昔つから、世界、国々の権勢に驕る国王、贅沢三昧の女王様、はては大富豪の奉納した、絢爛華美を競う宝物が山ほど。ぎつしり、積まれてるんだよ。世界七不思議の一つ、それがあのデルフィ神殿の七宝庫。大宝庫が七つもある訳じゃ。執政長官はそれが自由。勿論大つぴらには出来んが、こそこそやってんだよ。時々持出しては懐を肥やしてやがる。鍵番は執事長。どうじゃ、わしの狙い、もうわかつたらうが」

奴隸頭

「いや、恐れ入りました。さすが、わしの親方さま！ 博打も博打、大博打、これ程とは！」

イアドモン

「わしは、予ねてから狙っていたんだ。こせこせした仕事、飽きがきたでの。宝庫の一つや二つ、空っぽにしてやるう思うてな、こゝへ商売に来る度び狙つてた。今度こそ、糸口を握つたんだよ。わしやな、有名な彫り物師か知らんが、ほりや、大理石の彫刻は用ないんじゃ。宝庫に匿まってある、シバの女王様の、大宝石をちりばめた王冠、腕輪、首飾り、ソロモン王献上の黄金の牛よ。黄金の飾り物を狙つとる。よう見とれよ。何年かしたら、禰宜を手先きに使うて、七宝庫空っぽ。はゝ、うわつはゝゝ」

奴隸頭、驚くも、親方の朝飯前を知るので、

奴隸頭

「いや分りました、と。あの禰宜は、もう買収済み！ つちゆうことで」

イアドモン

「しっ！、声が高い。砂金の袋の一つ呉れといたわ。お前にも、しこたま儲けさすからな、慎重に、それから大胆に。しっかり、やるんだぞ」

奴隸頭

「は！ はい！ 張り切つとります」

イアドモン 「張り切りはまだ早い！準備だけは進めておけ」

● 下手船着場、少し遠くの銅鑼がジャンジャン、鳴る。

(船着場の声) 「おーい、船が着いたぞおお……」

(船着場の声) 「コリント通いの渡しぞおお……」

イアドモンと奴隷頭、急ぎ倉庫の中へ消える。

○ 下手船着場より、様々な衣装の巡礼が登る。茶屋へ、露天商の小屋へと活気が戻る。

露天商や茶屋の女たちが口々に客を呼ぶ。アイドンは声高に、巡礼たちへ参詣の案内、アイドン 「はい、はい参道はこちらあ。お着きになりましたら、まづカスターリの泉で

お舂を浄め下されませ。御神殿の右下が神聖競技場。辺りが天幕張りの宿営どころにございます。それから神聖競技場の裏に坂があり『難儀な坂道』と謂います。登るとパルナツソス山の麓、矢車草が一ぱいの高原に出ます。

そこからがアテネへの山道になりますが、大変難儀で嶮しゅうございまして、こちらへお帰りになって渡船がご安心、ご安全にて、ようござります。

お帰りはこちら。お帰りの節はあ是非とも当店へ。黙って立てばびたりと当てる。はい当世唯一の御神託判断所、御神託判断所はこちら。こちらにございます。親切誠実、間違いつこなし！が、モットーでござります」

など、これ宣伝につとめる。

○ 巡礼一行は、夫々晒し者奴隷を一瞥、蔑み笑い、遠廻り。唾を吐き捨てる。

晒し者奴隷は顔を見られまい。と、両手で頭を抱え込んだり、奴隷服の上着の襟首を引上げてすっぽり被る。時々半身を起し、痛む下肢をかばう。

晒し者奴隷 「あつい痛っ……」

● 巡礼の一と騒ぎがあつて、最後が上手参道を登ったところ、入替りに学校帰りの悪童たちが戦争ごっこをしながら、ばらばら下りてくる。晒し者奴隷に気付き、覗き込む。からかったり、弄り廻す。

子供1 「穢つないなあ。こ奴っ昨日から晒し者になつてんだ。頭あ砂だらけだし、

虱がうようよ動いて、うわ穢っ」

と、跳びのく。別の悪童が棒の先きで、ちよい、と触る、

子供2 「生きとるんかい、あ動いた、うお化けじゃあ」

○船着場から、ロドーピス率いる、舞姫スイ・レンと舞妓二人の舞姫一行が現れる。
ロドーピス、倉庫へ声をかけ、イアドモンと奴隷頭が出てくる。

ロドーピス 「親方さん、只今」

イアドモン 「おゝ、戻った、戻ったか。おゝ皆々、元気そうで何より。ん？今の渡船か？」
舞姫それぞれ、三方札よろしく二人に挨拶。ロドーピスが金袋を渡す。

ロドーピス 「ええコリントを流してきました。はいこれお預け。ずっしり重たいでしょ。

何処もおゝうけでしたわ」

イアドモン 「ほう！エジプト随一のご一行さまよ。これ位のことなくちゃ、始まらなくて
金袋を受取り、奴隷頭に渡す。

奴隷頭

「なる程、こりや重い。三分の一は、ロドーピスさん、お前さんのもんじゃ。
もうそろそろ、身代金の積立も出来ておろうがな。一度計算してやるからな、
この調子で頑張るんだな」

イアドモン

「お前さん方も疲れたろ。今夜は、船に泊るか」

スイ・レン

「はい、今夜は船に泊めていたゞきまして、明日からまた御神殿前の広場で
稼ぐつもりであります」

イアドモン

「ああ一城のお姫様が、稼ぐなんて言葉を使うようになったか。流しの舞が
板についたとみえるなあ。以前ははじめじめと、泣いてばかりいたもんじゃ」

ロドーピス

「親方さん！ひやかすのお止めなされ。何も好きこのんでやっているのと、
違います。でも皆さん、とてもお上手になられました、わたくし、大分楽に
なりましたの」

奴隷頭

「そりや、仕込みがうまいからよ。芸一条、エジプトでも鳴らした、芸の虫
じゃからなあ」

ロドーピス

「それは昔のこと。何時の間におばあちゃんになっちゃって。若い人には、
かないません」

○子供の投げた石が、飛んでくる。子供たち、晒し者の奴隷に向って石を投げつける
最中。ロドーピス、夢中で跳び、

ロドーピス 「何するの、いけません。いけません！人さまに石を投げつけるなんて…

およしなされっ！」

子供1

「だって、奴隷だよ」

ロドーピス

「奴隷だって人間です！」

子供2 「だって、あいつ、昨日から晒し者になってるんじゃない？」

ロドーピス 「晒し者なら、よけいでしょ！」

子供3 「きたない、きたない、みつともない奴隷じゃよ」

ロドーピス 「穢くも、晒し者でも、奴隷でも、兎にも角にもおやめなさい。あんた達、こういうお話知ってますか。お池があつたのよ。蛙さんが棲んでいたのよ。そこへ子供が大勢きてね、蛙さんに石をばらばら投げたの。そしたら、一匹の蛙さん、水の上へ頭をのぞけてね、『坊ちゃんよ、石を投げるのはやめてください。あんた方は面白いでしょうが、わたしら命がけです』とといったの。だからかんべんしておやりなさい」

子供たち不服げ。一方、ロドーピスの気迫と、舞姫姿に気おくれ『うむ！』と承知。一勢に『わあっ』と下手海辺の方へ駆け下る。

●ロドーピス、倒れている奴隷を覗き込む。

ロドーピス 「あなた、ご病気？どうされました？」

(奴隷が頭を動かし、顔が向く)

ロドーピス 「えっ、あなた、イソツプじゃない？おゝイソツプさん。あんた、こんなとこで、どうした？」

ロドーピス、取縫^{すが}り抱き起す。イソツプ、下肢をかばい顔をしかめる。スイ・レンが飛んできて、イソツプに縋る。

スイ・レン 「あ！イソツプさま、どうされたのですか？」

アイドンが小屋掛けから出てきて、

アイドン 「ご婦人方、お知合いか？こん人、大怪我して、足が折れていなさるんです」

ロドーピス 「足が折れっ？分かった。くそ親方、口減らしに売り出して、売れないからほったらかしてんのね。あん畜生！本性出しおったな」

○ロドーピス、奮然と倉庫へ駆ける。

ロドーピス 「親方、なんてことする！あんまり非道い！」

倉庫から、再度イアドモンと奴隷頭が出てきて、

イアドモン 「なんじゃ、大げさに。もちいと静かに話せ。それか、それはな、機能を失えば、人は石ころより役に立たぬ。と、謂うものじゃ」

ロドーピス 「……」

睨み据え、

奴隷頭 「ロドーピスさん、そうむきにならんでよかろうがな」

ロドーピス 「あんたら、ひとの血一滴、持ってないかっ！」

イアドモン 「用のなくなったものは、何処へでもいって、野垂れ死ねばよい」

ロドーピス 「……」

拳が震え、

イアドモン 「野垂れ死も、奴隷は人らしい格好してるからな、始末に困る。そこいきや、

小石の方が可愛いゝもんさ」

奴隷頭 「ったく、こんな街中で骸晒されては、端が迷惑じゃ。早よ穴でも掘って、

埋まってほしいもんじゃ」

ロドーピス 「それほどまでに用がないとおいゝなら、イソップさん、私がいたゞいて、

よろしいかっ！」

イアドモン 「おつとまで、売物買物じゃ。幾らで買う？」

ロドーピス 「は？用ない、穴掘って埋めてしまえとおっしゃる端からなに？あんたら、

そんなにお金欲しい？」

奴隷頭 「欲しいね、金は。いくらあつてもよいもんじゃよ」

ロドーピス 「よい、分かった。わたし、少々自由になるのが遅れてもいゝ。先づ、この

イソップさん先きを買うわ。わたしの身代金から、差っ引いてちょうだい！」

イアドモン 「そうはいかん。奴は、奴の金で身請けさせてやろうじゃないか。あいつ、

金持つてるのか？」

ロドーピス 「そんなお金、ある筈ない！売り買いだから、私が買うと、申しあげてる！」

イアドモン 「奴隷を、奴隷に売る訳にゃいかん。ああ、わかった。それほどなら、当分

貸したるわ。あとで貸料を取るからな」

奴隷頭 「それぞれ、貸賃、たんまり頂きますからな」

言い捨て、二人倉庫の中へ入る。

○ロドーピス、二人を睨み据え、イソップの処へ戻る。

ロドーピス 「占屋さん、あんたのところ、山羊のお乳はない？」

アイドン 「あ？いや、あそれなら、茶屋で売ってるはず」

スイ・レンが茶屋へ跳ぶ。壺に入れた山羊の乳を抱え戻り、ロドーピスと二人で飲ませる。イソップうまそうに飲み、身震い。やゝ生気を取り戻す。

ロドーピス 「おお！気が付いた。あたしロドピスよ、わたしは、ロドーピス」

イソップ 「ロドピスさん……おゝ、ロドーピスさんか！」

（縋りつき、崩れる）

イソップ 「逢いたかった、逢いたかった」

ロドーピス 「あたしも、わたしもよ。別れてから、あんたのこと気になって、気になつて……」

（暫し涙目）

ロドーピス 「あんたんこと、一日とて忘れたことはなかったわ。何処でどうしているか、何時また売られるか分らぬ身。売られてしまえば、居場所も分らなくなる、お互いに……」

イソップ 「果敢ない身。何時の間に、知らん人に売渡される」

（涙を拭い）

イソップ 「あんとき、あんたと別れてから、もう八、九年になるか。生きていたのが不思議さ。こんど、足を折ってしても」

ロドーピス 「そうそうその足。話は後にして、早く手当を。あの獣、どうせ碌な治療も！占屋さん、其処な占屋さんお願い、お願いです。この人、あんたのお家へ連れて行って」

アイドゥン 「わしの家は貧乏でなあ」

ロドーピス 「そんなこと、聞いてない！あんた、自由民でしょ。自由民なら、お家はあるでしょっ？」

アイドゥン 「うむ、確かに違くないが……わしの家は、小っさい。人さまのお世話など出来んところ」

ロドーピス 「いゝの、お家が小さくともいゝのです。土間でいゝのよ。暫くお貸しください。食い扶も治療代も、わたしが払います、お助けを。ご恩にきます。お願い、お願い致します。それ、スイ・レンさん、舞妓さん、そっち、頭そつと。わたし折れた足の方、持つから」

●スイ・レンと舞妓二人、イソップを抱え起そうとして、悲鳴。

イソップ 「あ痛っ！まっ、待って」

（イソップ半身、暫し喘ぐ）

イソツプ 「スイ・レンさん、と謂ったの、どのお方？」

ロドーピス 「ああ？スイ・レンさん、その舞姫よ。どうした？」

イソツプ 「もしやロドス、あやエデホースさまの、姫さま？」

ロドーピス 「そう、今は私のお弟子、奴隷よ。これも訳がある」

イソツプ 「聞いた。こゝで聞いた。なあスイ・レンさま、あなたのお父上に今しがた、

お目にかゝった」

スイ・レン 「えっ、お父上？あの、えっ？」

ロドーピス 「イソツプさん！それで？」

イソツプ 「こゝで奴隷の競売りがあった。お父上、売られていきなされた。お別れの

時、わしの手を取って、一日たりと、姫のスイ・レンが忘れられぬと」

舞妓二人、袖で顔をおゝう。スイ・レンはイソツプを凝視、

スイ・レン 「お父上、何処へいかれましたか？」

イソツプ 「山向う、山地党の長老様に買われていきなされた」

○スイ・レン起ち、遠く岩山の彼方を見つめる。

ロドーピスと、舞妓二人、後で彼方を見つめる。

スイ・レン、やがて、ロドーピスの胸に身を投じ、ロドーピスこれを抱く。

●一等禰宜は運上所前、イアドモンと奴隷頭は倉庫前で、これを眺める。

静かに幕――

- ^㉑ ドラグマ ↓ ギリシャ通貨。一ドラグマ ≡ 六オポルス。陪審官日当が二オポルス。労働者の日当が一ドラクマ、戦争加算で二ドラクマとされる。本書は一オポルス ≡ 2千円で換算している。
^㉒ ネブカドネザル二世 ↓ ネブカドネツアル。ユダ王国を滅ぼし、バビロン捕囚を実行した。
^㉓ ジュダヤ ↓ 南東からの侵攻民族。アーンアン人と対（史実的にはリュディアかペルシャ）。
^㉔ 野蕃国マケドニヤ ↓ 放牧中心の貧しい新興国。元々ギリシヤ人で言葉も同じ身内。社会制度が異なり王治世のため、参政権を持つポリス民から見ると古臭い。
^㉕ コリント ↓ コリントス地峡にあるギリシヤの有力商業都市で、アテネへの道はこちらが楽。
^㉖ チャリオット ↓ 当時の騎兵が使った戦闘用の馬車。
^㉗ バビロンの都バクザット ↓ 現イラク首都。ティグリス河畔で東西交易の要衝都市。当時バビロニアはこの地域を支配下に置いている。バビロンはユーフラテス河畔で近い位置関係。
^㉘ 徐ろに ↓ 勿体ぶって、重々しく、悠然。
^㉙ 浅草寺観音籤 ↓ 第七十六・吉。病氣治る。引越良い。
^㉚ カスタリの泉 ↓ アポロンの求愛を拒んで入水したカスターリア（ニンフ・女神）に因む霊泉。
^㉛ 神聖競技場 ↓ スタディオンと呼称する、体育競技の行われる運動場で、ポリスの必須設備。
^㉜ 少年と蛙 ↓ 二幕『狼少年』を含め、寓話の派生多く、いずれも底本は未特定。

■第二幕 古代ギリシャ・フォキス・ポリス（地区）

『運勢占屋の家の前』

◎場所・デルフィ神殿参道の途中

@時は一と月ほど後である。

@参道が横切り上手へ緩い上り坂になる。下手から参道をちよいと登ると、執政長官の大邸宅がある。母屋前に狼煙台があり、両側に長短の槍、楯、弓矢など、武器が整然と並ぶ。奥に本邸があり、一見、小城のような構え。衛兵が時々見廻りをしている。

@遠景は、上手へ行くほど登り斜面となり、段々島が続く。

@上手の参道登り口から手前にかけて、緩い下り斜面となり右手前への小道がある。小道の左横に、みすばらしい小さな家がある。その手前から長官邸の前にかけて、小さな池がひろがる。池向こう、参道きわの堤に青草が生え、小さな家の左手に、小振りなオリーブの若木が、寄り添う様に二本立っている。

■開幕

—ここはどこの細道じゃ、天神さまの細道じゃ—

●『通りゃんせ、通りゃんせ』イソップと子供たち数人が歌い乍ら出てくる。

イソップの脚は治り、びっこを引く。青草を山と抱え参道を下りる。色黒で奴隷服、変わらず引立たぬ醜男だが、前より髪を整え、やぶ睨みの眼光が鋭い。子供たちは彼にすっかり懐き、嬉々としてまつわりつく。小さな家の裏で、山羊に青草をやる、

イソップ 「フォキスは春ともなれば綺麗よな。矢車草やタンポポがあたり一面咲いて。

コリントの海は、オリーブ色に輝いて、えゝ風が吹くしなあ」

子供1 「牧場は青草いっぱい、いつも気持ちがいいね」

イソップ 「皆んなよく遊んだなあ、この辺に坐ってひと休みしよう」

○オリーブ若木の向う、小高い池の堤へ、子供たちと坐り込む。

子供2 「ねえ、今日は何のお話？」

イソップ 「ほう、よしよし。あ、ちよいと、聞きたいんだけど。この間まで、わしに

石を投げてたよな。あん時の餓鬼大将は？」

子供3 「餓鬼大将なら、何時だってあいつじゃよ」

子供1を指す。

イソップ 「あは、矢張り……」

(子供1に向い)

イソップ 「お前か？餓鬼大将」

子供1 「だって、穢なかつたんだもんー！」

イソップ 「はゝ、あん時きや穢なかつた、うん。穢いもんにはすぐ石でも投げたくなるもんさ。いゝんよ！それで……今はどう？」

子供1 「今？今、今は大好き。おじさん、おもしろいお話、たあくさん、してくれるんだもの！」

イソップ 「皆んな？」

子供一同 「雲一杯！」

イソップ 「うっはゝゝ、子供には好きになってもらえるなあ。幸せよなあ、子供が好きだで。一緒に遊んでる時が、一番楽しい時なんよ。けどな、わしには自由がない。暇がないんだよ。さあ、そう今日は、嘘つき牧童のお話をするか」

子供一同 「うん、うん」

耳を傾ける。

イソップ 「あるところにじやな、大きな牧場があつてな、そこに君たち位の羊飼いが番をしていたんよ。ところが、毎日退屈なもんじゃから、一つ大人を驚かしたろう思つて『狼がきた、狼がきたあ！』と大声で、大人のいる方へ走つていったんよ。そしたらね、その辺の大人たち、それ狼じゃいうもんで、手に棒だの、鍬だの、鎌だのを持ってきたんさ。ところが、狼などどこにもいない。皆んな帰つていった。羊飼いの子は、面白がつて、二度も三度もね。ある日、狼が、やってきた。『狼だあつ、狼がきたあ！』つて、本気で叫んだ。嘘をついてやがる、騙されるか！と大人は知らん顔。羊は喰われるし羊飼いの子……喰われてしまった」

子供一同 「………」

イソップ 「どう？」

子供1 「うん」

イソップ、不安げ、

イソップ 「あの？どう？」

子供たち、我に返る。静かに、

子供1 「誰もこなかったんだ」

イソップ 「大人も肝心なとき、助けにな。行かなかったもんだから……」

●貧しげな巡礼が一人、上手参道から声を掛ける、

巡礼 「この辺り、イソップさんというお方はおりませんか」

子供1 「イソップさんなら、このおじさんだよ」

巡礼、見向きしない、

巡礼 「でも、イソップさんなら、もっと立派なお方でしょ」

イソップ 「左様きつと。イソップというおひとは、あのお邸にでもいるんでしょう。」

彼処で聞いてみなさるがえ々」

巡礼 「けど大そうなお邸、相手していただけるでしょうか」

子供2 「だあめさ。こゝで一ばん偉い人のお邸なんだもの。知らない人なんかあ、

ペケペケのペケさ」

巡礼 「でしような。どうしたものかな」

イソップ 「巡礼さん、ご用は何？」

巡礼 「はい、御神託の判断をお願いしよう思いました。イソップさん、大そうに

お上手ときいたもので」

子供1 「あゝ、それならやっぱりこのおじさんのことだよ。よく巡礼さんが尋ね

てくるよ。御神託の判断をしてもらっている。料金、取らないからね」

巡礼 「そうそれ、それでございます。それではやっぱり、あなた様が、イソップ、

様？」

半信半疑。イソップまた、他人ごとに話をそらす。

イソップ 「その人は、自分の名前を知らんらしい。色黒で、まるでエチオピア人だと。

それでアイソップ。詰まってイソップと呼ばれるそう。そんな人に判断

なんか、出来ますか。その辺を探してみなさるがえ々」

巡礼 「左様ですか。そいじゃ、もちいと探してみます。はい、ごめんなさって」

巡礼行きかける、

子供3 「巡礼さん！この人本物よ」

巡礼 「からかわんでください！」

子供1 「本当に、このおじさん、イソップさんだよ」

巡礼 「ですか、そうですかなあ？」

戻り、つくづく眺める。また行きかける。

イソップ 「あつは、信じられぬか。そうよのお……まあえ。見て進ぜましょう。

御神託を拝見できますか？」

巡礼 「左様で」

試しに、といった風。御神託の紙きれを取り出す。

巡礼 「これでござります」

○イソップ黙って受取り、いきなり読み出す。

【戸内防重厄】戸内重厄を防ぐべし↓家内に厄い来る。それを防ぐ心づかいが大切なり

【花菓見分枝】花菓分枝を見る↓枝がわかれて、別々になると万事和合せぬ

【厳霜纒過後】厳霜纒過後↓厳しい霜消えて、春になれば良事あり

【方可始相宜】方始めて相宜べし↓家内和合して、宜しきことのみ多くなるべし、と。

イソップ 「で、巡礼さん、あんたの家は、親子、夫婦、兄弟、皆が皆んな、喧嘩して

いるんでは？」

巡礼 「えっ！」

(巡礼驚き)

巡礼 「それ、その通りでございます。わたしと妻、わたしと子供、子供達がまた、

兄弟喧嘩ばかりしております」

イソップ 「原因は、あなたでしようねえ。気短でしょ？今は、あなた自身が我慢の時。

がみがみ言わんでおくと、すぐ良くなります。『今は冷たい霜の中にいるよう

なもの。やがて春のように暖かい中で、家内円満に暮せます』という御神託。

だから、がみがみ言わん。何もかにも、じつと辛抱。え、ですか」

巡礼 「はい、よう、よく判りました。ああ、このお礼なんと？」

イソップ 「いりません。礼は取ったことない。先刻、子供が謂ったでしょ？礼金のい

らん人じゃと。お安い御用。いつ何時でも、ご用あればお越しく下さりませ」

巡礼 「はい。先刻は、誠々申訳ありません。有難う、どうも有難うございました」

巡礼が、参道を下向する。入替りに、

● スイ・レンと舞妓二人が、小走りに参道を上る。

スイ・レン 「今日は」

イソツプ 「おや、スイ・レン姫さま、ん？これからお仕事」

スイ・レン 「はい、御神殿へ参内致します。彼処、参詣の方が多い故、舞に集って頂きます。ロドーピスお姉さま、とうに参内されました」

イソツプ 「おお、皆様の舞は美しく美事ゆえ、流行りましょうぞ。結構なことです。

大いにお稼ぎなさいませ。その内にきつと、お父上様に逢えましょう」

スイ・レン 「はい」

暫し彼方の岩山を見上げる。

気をとり直し、子供たちに、

スイ・レン 「あなた方、お話のおねだりですね？お躰、まだお悪いのですよ、お手伝いしてなさいませ」

子供一同 「うん、わかった。うん、大丈夫」

スイ・レン 「では、御神殿へ、参内致します」

○舞姫たち三人、上手の参道を登る。

子供1 「あの、舞姫さま……どこの、お方？」

イソツプ 「清楚な姫さま。えゝなあ美しい。美しいは素晴らしい。誰にも好かれる。

それに、世をすくすく^三渡れる。氏なく玉の輿。アポロン様やビーナス様、みいんな、お美しい。美しく美しく、ぴかぴか輝いておられる」

(あとは独り言)

イソツプ 「醜くて穢くて、その上奴隷。これをどうしろ。嘲り蔑みの中、一条に考えてきたが、判らん！」

(思い直し)

イソツプ 「あゝ、舞姫さまのことよな。よろしい。じゃ、今日はおまけ。ピラミット造りのお話でも、しようか」

子供2 「え？ピラミット！でっかいお墓かあ、あれ造るお話？早ようして」

イソツプ 「まあまああわてるな、山のようなお墓じゃからな。並々のことでは出来やせん。大きな切石を、一つ一つ積重ねていくんじゃ。しかしな、人間の力と謂うは、怖ろしいもんだ。よく覚えておくんだよ。一步を積重ねていくと、

どんなことでも成せる。それでな……、

こんな大つきい石だ。一個運ぶのに、わしのような奴隷が何百人もかゝつて、太い長縄をつけて曳っぱる。それを四方八方から一つづつ曳っぱって重ねていく。段々高くなるから、道の傾斜がきつくなって上げられなくなる。それで、もつと遠くから長い坂道を造り直す。その時は坂が緩くなるけれど、曳く距離が長くなる。またきつくなつて、遠くから坂を造り直す、長くなる。この繰り返し。朝から晩まで、奴隷はたまつたものでない。

そんな時、美しい女の人が石に立ち、歌を唄い乍ら音頭をとった。ほれ、ロドーピスさん。エジプトでも勇名なヘタイラと謂つてな、芸妓さんじゃ。トラケミー生れで、アマシス王様の時、十三で売られてきたんだ。舞が上手で綺麗。真白な神衣を着けて金銀の采配をかざし、音頭をとる。大石が動き出す。どうにも動かないと石の上で舞った、神々しい舞。どれ程、力づけてくれたか知れない。だから、ピラミット全て、ロドーピスさんが造つたようなものだ、王室の書に『舞姫ロドーピスが建造』とした、と記してある。

ロドーピスさんとはそれ以来の奴隷仲間さ。ピラミットが終ると、わしは売られた。ロドーピスさんと一緒に、イアドモンの処へ。焼ける熱い砂漠で、武器拾いを毎日々々やらされた。

ロドーピスさんは、舞の巡業で勇名を馳せたが、苦勞されたとお伺いする。それ以来、別れ々々だったが、こゝで逢うたは九年目か。

昔とちつとも変らずお優しい方。助けてくださった。ご恩返しが何時出来るかと思うと……悲しくなる」

(暫し物想い)

イソップ 「ああ、先程の清楚な姫さまはな、今年十六になられるのだが。ロドス国のご大老、一城主のお姫さま。綺麗で清らか。世が世なれば……おや？いかん、早い夕立か。この話は、また次ぎにしよう」

(村雨が、ばらばら降ってくる)

イソップ 「なんじゃ、こりゃ強くなるか知れんぞ。お前さまたち、早よお帰り。山羊しまわなくっちゃ」

イソップ立ち上り、占屋の家裏手に廻ると山羊と青草の手仕舞いを始める。子供たち、それを手伝い、見え隠れ。

●アイドンを、下手から参道を登ってくる。

アイドン 「あれ、本降りかな。おやおや、お子たち、まだおるのか。早よお帰り。おっかさんが待つとる」

子供1 「うん、じゃ、また明日お話ししてね」

アイソップ 「おゝ、明日は……そうだな『葡萄と狐』、今日は早くお帰りなされ」

子供2 「すぐ、帰るよ。葡萄うと狐？面白そう。早よ明日、来ないかな」

アイソップ 「あつはゝゝ、まだ明日はいくらもあるさ。明日の次ぎは、また明日じゃ」

子供1 「明日の次が明日で、その次ぎの明日が、明日で？えっと、その明日が明日で、どこまで続くんだろ」

アイドン 「そんなこといいから、大雨にならんうち、さっさとお帰りなさい」

子供一同 「さよなら、さよおうなら、また明日ね、あれ？ええっと、蛙が鳴くから、帰あえろ、かあえろつ、と」

○参道を駈け下る。アイソップとアイドン、オリーブ木の下で、暫し雨宿り、

アイドン 「ああこゝがえゝ。雨がおさまるまで、聞いてくれませんか。実は今日、えゝお話がありましたな、頼み事をしたいんですよ」

アイソップ 「ほう、えゝお話？結構ですな。どんなお話ですか」

アイドン 「予てから御神殿の広場に店を、と思うてた。彼処は何といつても一等地。市場通りは、おこぼれか二度目がいゝところ。実入りが厳しい。ところ今度な、御神殿前の判断人が一人、歳が歳ゆえに隠居を、と謂うん。それで、その株を買うことにしたんよ」

アイソップ 「ほお、そりや目出度いこと。御神殿の広場じゃなきや、商売になりません。彼処は他に判断所があるけど、みんな押すな押すなの大はやりと」

アイドン 「うむ、あの広場でないと、あかん。そこでお願いなんだが、どう？ご判断の手伝い、やってくれませんか」

アイソップ 「えっ？滅相もない。わしは、奴隷身分でございます」

アイドン 「奴隷が取扱っていかん、という規則はない、はず。まあ方に一つを考えて、一応は考えた。先づ、小屋掛けをうまく。外から見えないようにして。あなたが承知してくれたら、給料も考えとります。上りの三分の一を、あなたに」
アイソップ 「め、めっそうもな。奴隷に給料出すお人がどこにありますか。出来んです」

アイドゥン 「何を！ロドーピスさんは、親方と三分の一の契約が出来とる！あの人は立派な舞で、身代金積んどる。あんたは判断ができる。あんただって三分の一を積んでいけば、半歳聖たんうち、身請けの金位貯まる。自分で自分買えばえゝん。何時まであんな奴の下にいるおつもりか？早よ自由民になりなされ。自由になる機会など、そうそうない。」

あの奴隷頭、あんたを四オポロス、陪審官の、たった二日分の給料で売るといつてきた。多少上がったって、いくらやらなくても、身請け金位、すぐ貯まりますぞ。あんた、その金で早よう自由民になりなさい。なああ、そうしてくなされ」

イソップ、暫し考え込む、

イソップ 「有難う、そんな、有難いこと……」

(暫く言葉なく)

イソップ 「これほど想ってください方……」

(泣きはじめる)

イソップ 「物心ついたとき……一人、奴隷」

アイドゥン 「……」

イソップ 「父も母も……自分の名も知らん」

(イソップ、涙を拭き)

イソップ 「ああ難うございます」

アイドゥン 「承知してくれたか？」

○イソップ、きつとし、

イソップ 「それは、な、り、ま、せん。わしは嘘がつけんです。ご判断をお求めにきた方が、不幸になると願ったら、どうします？本当のこと言えば、悲観して、自殺しないとも限らん。上手く謂って、その方を励ます……んな方便、よう出来んです」

アイドゥン 「そうか、あんた気一本で、嘘が言えんと、誰でもよう知つとる。あの労苦の中、よくまあ素直なまゝ大人になったと、感心しとる」

イソップ 「子供が好きだから、心を頂いでるのでしよう。実際は、奴隷故、色々な衣、着とるでしょうけど」

アイドゥン 「いや、ロドーピスさんや、わたし。あんたこの歳で、童心を失わずと、高

く買ってます。この話、よく考えといての、えゝか。あんた、自由民になれるか、なれないか瀬戸際じゃ。これから、御神殿へいく。本決めに、決めてきますからな。よう考えといて下され。おや……小降りになってきたかな」

(古ぼけた自分の家を見て)

アイドゥン 「ちよい、頼みますぞ。すぐ戻ってきます。あゝ広場に小屋掛が出来りや、こんな古ぼけた家、屁を喰え。今に大きな新しい家、建てゝやるわ！」

言い捨てゝ、上手参道を登っていく。

●雨蛙が、びよん。イソップがつまみ、掌の上に乗せる。

イソップ 「お眼目はまっ赤な、くりくり目玉。可愛いゝ、なあ」

(暫し考え)

イソップ 「わしの可愛さ？どこをこうして。もうほんのちよつぱり、可愛さがあつてよさそうなもんよ。それで嫌われて。くそつ！分らん」

びっくりした雨蛙が掌の上から飛び跳ねて、池の端から参道へ向い跳ぶ。イソップ、慌て追いかける。

●上手参道から平原党の兵が三人、決死の勢いにて馳せ下り、市場方向へ駆け抜ける。

イソップ 「うおお……そのけそのけ、お馬が通る」

危なく拾いあげる。オリーブの木の下へ戻り、雨蛙を池に放す。村雨は小降りにて、やがて止む。

●執政長官邸の裏口から、デルフィ神殿一等禰宜が出てくる。さりげなく、イソップの近くに立つ。

一等禰宜 「なに独りぶつくさ言つとる。ガマの面、しくさつて」

イソップ 気付く。が、知らん顔をして、

イソップ 「古池や、ガマがとび込む水の音」

一等禰宜 「なんじゃ？」

イソップ、小石を拾い、池へ投げる。

イソップ 「水の輪、綺麗。次から次へ、丸うなって、あっちもこっちも。何故にこうきれいなん？」

一等禰宜 「水の輪？とぼけるな。蛙の子は蛙。争えぬものさ。お前何時も、蛙と遊ん

どるな。書くものも蛙の子だ」

イソツプ 「袖の下が好きなら、蛙の心もち、判らんもの」

一等禰宜 「あんだ？」

(むっとするも、意味が汲み取れない)

一等禰宜 「お前、沢山書いとるようだが、話がみんな蛙の子。どれもこれも奴隷精神。

こせこせして、なに一つ品が無い。こう格調高い、知性溢れる雄大な物語は、書けんのか」

イソツプ 「あ？んじゃと？」

一等禰宜 「奴隷の書いた愚鈍なものと謂っている。卑屈、劣等感、どおれもこれも、おどおどして、品がないわ」

イソツプ 「わしが書いているものゝ、どこに卑屈や劣等感がある！弱い者の立場から書

いてるのさ。子供の世界は、皆いんなのびのびして優しい。よう読め、お前さんのように、何時も人をいじめているお人にや、それが判らんだけよ」

一等禰宜 「まあよい、そのつもりならそれでよかろう。だがな、よく考えろ。お前は今、弱い者の立場とかいったな。弱い者即ち、奴隷じゃよ。弱いから奴隷になったのだ。お前の話、『池の中の蛙』にしても『峠の泥棒』にしる、明らかに奴隷根性だ。こんなもの、少なくとも、このフォキス・ポリスにいる限り、書くのは止めて貰おう。子供たちの風紀上、教育上もはなはだ良ろしくない。おまえの話は毒にしかならん。害毒をまき散らしておる」

イソツプ 「わしはお前さんの奴隷じゃない。何の権利があつて『書くな』と命ずる？」

一等禰宜 「ほおお、少しばかり詩人の真似事が出来ると思つて、大きく出たな。このフォキスで書くこと、一切まかりならん、我は、デルファイ神殿の一等禰宜である。デルファイ神殿の名において命ずる、絶対に許さん。よいか」

イソツプ 「そりや面白い。ご神殿一等禰宜さまのご命令かよ？ところがな、デルファイ神殿の枢密女官ピュティア様は、わしの話がお好みで『次の話はまだか、もつと書け、大いに書いて見せておくれ』と、有難いお言葉を賜る。お邸が、ほれ、近いこともあるし、お使いの方が、度々見えるわ。まあ、あなた様のお指図は、ちいと、お受け出来かねるわな」

一等禰宜 「……」

イソツプ

「お前さん、弱い者の気持ちは、奴隷の立場だとお謂いだが、奴隷こそ本物の人間ぞ。奴隷があらゆる生産をしとるでないか。お前さんは、その上に胡坐かいて遊んどる。奴隷いなけりや、生きる事すら怪しい輩が」

一等禰宜

「なにを、よまいごとを言いおるか。弱いからこそ、奴隷なのだ。あの此処な弱虫め、四っん這いのガマの、大ガマの……このくそっ！うじ虫め！」

イソツプ

「……」

一等禰宜

「あでもな、奴隷も時に、使いものになるのがあるよ。ガマ、あ、いやさ、おまえロードーピスト、何時からの知合か。どこで知合った？」

イソツプ

「ああ？それ聞いてどうする。昔っからの奴隷仲間よ。お前さんが、それを知ったところで、どうする」

一等禰宜

「いや、ちよいと用があるから聞いておる」

イソツプ

「ああ？つまみ喰いの魂胆か、左様か。このくそ悪魔！あの人にちよつとでも触ってみろ、ただで済まさんぞ。あのお方はな、イアドモンすら、どうも出来なかった。一目も二目も置いている。だから、旅の舞姫として、自由に働かすより外なかった。あの髪、顔立ち、その立ち姿、如何。神々しい瞳、俗人は眼のやり場にすら困る。瞶められてみる」

一等禰宜

「そこじゃ、その通りだ。ロードーピスト、お弟子のスイ・レンを神殿の重い役目に就けて恥しくないと考えてな、真剣だ。それで相談だが、一つ、話に乗ってくれぬか。知合のお前から話してくれたほうが、早いと思つてな」

イソツプ

「何をお言いじゃ。二人はもう、自由になる日が近い。そんな、片っ苦しい宮仕えなど、やるかどうか判らん」

一等禰宜

「いやそうあつても、一押し二押し、三に押し。その押役を頼みたい。うまくいけば、お前にもよい役職を授けることが出来ると謂うもの。この仕事、引受けてくれぬか」

○イソツプ、暫し黙考。言葉を改め、

イソツプ

「一等禰宜さま、デルファイ神殿といえば、世界最高峰の御神殿。それを奴隷上りに、どんな役目を与えるというんですか。考えものでござりましょう」

一等禰宜

「尤も、少し話さずには、お前も得心出来まい。これは外に漏れると困る。胸に仕舞ってもらいたい。枢密女官ピユティア様、あのお方、執政長官様の御息女だが、お齡がもう大分、あれだ。この度ご縁があつて、テッサリア、

執政長官殿の元へと嫁がれることになった。テッサリアは、小さなポリス。だが、長官がご夫人を亡くされ、その後ピュティア様を望まれて、お話が進んでいるところだ。若しそうになると枢密女官の席が空く。だからその後、ロドーピス、巫女には、スイ・レンを、と考えてな」

イソツプ

「そりゃいきなり、お役目重すぎませんか。枢密女官と言えば、巫女の言葉を詩や韻文に誌す大切なお役目。巫女は神のお告げを発する一層重いお役目でしょう。こりゃ、二人とも勤まりません」

一等禰宜

「ところが、そうではない。ロドーピスはトラケー、スイ・レンはロード生れだ。それでいゝ」

イソツプ

「は？えらく簡単に割切ってござりますが、なに故？」

一等禰宜

「こゝデルフイ御神殿の巫女がお授けする、神のお言葉と謂うは、この地の先住民の言葉だ。その先住民とはな、この地を追われて、エーゲの島々へ散った。一部が今もあたりに残っているという。だから、ロード生れなら、その言葉がすぐ判る筈だ。その上、ロドーピスにしろ、スイ・レンにしても、非常に容姿が優れる。あれに、白絹の神衣を着せてみる。デルフイ御神殿の枢密女官、巫女といつても、決して恥ずかしくない、立派な姿になる。なあ、よく考えてくれよ。急ぐことはないが、一度当ってみておくれ。お前にも充分に褒びはする。お？噂したら、ロドーピスが参道を降りてくる」

言い捨て、長官邸の裏口へ消える。

○イソツプ、これを見遣り、考え考え独り言つ。

イソツプ

「どうかしてる。ピュティア様が何を今更……生涯、司祭を全うされるおつもりさ、なあ。なにそう好き好んで……貧乏ポリスのそれも後妻なんぞ……うむ、笑かしやがる。どうも怪しい。何話してた？晒し者になつてる時か？あれの絡みか！だまされてはならぬ」

(またしきり)

イソツプ

「あいつ、怖ろしい奴……うむ、そう。ガマガマ言いやがって、始めっから、わしに好意を持つとらん。書いた物にもけちばかりさ。あ、いやま、あんな奴がけなしても、大勢が支持してくれゝば。ああ、それでよいか」

(ロドーピス)「イソツプさあん」

イソツプ

「もう一つ、変なことを言いやがったな、あれ……神殿の御神託は、先住民

の言葉？あつ、御神託を初めて見た時から読めた。ロードの言葉とか謂ったよな……わしの生まれた島。それでこの辺の人は判断を苦勞するか知れんが、お蔭で御神託判断所が繁昌するか、なるほど。アポロンさまを捧じた民が、先住民とその神様を追っ払ったと。巫女様は、大地の割れ目に三脚檀据えて、檀に腰掛けて御神託を授かると謂うことだよな。お告げは先住民の言葉ってこと……んっ先住民の神様？そもそも、大地に封じ込められた神様。御神託がアポロンさまではない事になるが。おい、いいのか。こゝにも嘘がある」

●参道上から舞の足取り、舞衣の袖をひる返し、心浮きうき、

ロドーピス 「イソップさん！」

イソップ、なお捲し立てる、

イソップ 「強い奴には嘘が多いんだ。そう、弱い奴隷は、ぎりぎりにいるから、嘘の

ありようがない。デルファイ御神殿もまた弱い者から名与と栄光を奪い取って、どっかと胡坐かいて、果実だけを……」

ロドーピス 「何、独り言ちてなさる？イソップさん！いゝことあるの。いゝことよお」

イソップ気付き、

イソップ 「おつ、ロドピスさん」

ロドーピス 「何時もだけど、何ぶつぶつ」

イソップ 「なに、独り言？失礼、失礼」

ロドーピス 「よい報せがありまして、大急ぎで来ましたの。今ね、御神殿前の広場で、運勢占屋さんに会ったのよ。

そしたら今度ね。彼処の一等地に、御神託判断所の株を買いなさったのよ。あなたに判断人になってもらいたいから、あたしからすゝめてくれと、謂われたの。条件も最高じゃない、あなた」

イソップ 「ちよっ！待った、待ってください。いや、そのお話伺いましたが、先刻、断ったばかりです」

ロドーピス 「断ったあ？あんた、何言ってるか、わかってる？奴隷に上りの三分の一も給料呉れる人が、何処にあるの！それ貯めていけば、半歳で、自由よ。自由になって、何でも書けるじゃない。あんた何時も、もっと雄大なもの、長編が書きたいと、謂ってたじゃない。奴隷には自由な時間が無い、だからほん

の小話しか書けないと。あれは何ですか！」

イソップ 「あいや、その通りですって。そうなりたいのは山々。でもさ、わたしは嘘や方便が、うまく言えんでなあ」

ロドーピス 「嘘が言えない？そりゃそうかも知れないけれど。それとこれ、どう関係があるのか説明しなさい！こないゝお話、二度とないと謂うに」

イソップ 「御神託に『不幸になる』とあった時、どうしますか？その通りに謂って、世を果敢なんで、自らを殺めるといふことが、無いと限らんでしょう？わたし、方便できない」

ロドーピス 「……」

●時に、上の大邸宅の正門から、執政長官アントニオンが、手輿に乗って出てくる。衛兵四人が槍を片手に長柄を手に提げる。お供には太った出っ腹の執事長、一等禰宜が付き添い（執事長も同じ長い黒ガウン）、衛兵が一人、槍と楯を持ち輿を固める。

輿が参道を登りかけた時、先刻の平原党兵三人が山地党隊長と従兵を連れ、下手参道から大声で呼ぶる。

平原党兵1 「しばらく、しばらく、暫くお待ちください！！」

輿が降り、従兵は全て防ぎの構え。駈け付けた兵は、片膝をつき控える。

執事長、ずかずかと近づき、

執事長 「あわたゞしく、何事。その二人は！」

平原党兵1 「一大事にございます！」

執事長 「うむ！」

輿に戻り囁く。執政長官が輿から降りる。ロドーピスとイソップは慌てゝ、池端から下手参道の向う側へと降りて、道端の草陰に目立たぬ様に平伏。平原党兵1が進み出て、執政長官の前に膝をつく。

平原党兵1 「されば、申し上げます。これなる山地党の隊長、お願いの儀出来し、伝令に駈けつけました。聞けば危急を要すること、よって案内して参りました」

執事長 「要件を申せ」

山地党隊長、一歩進み出て膝をつき、

山地党隊長 「拝顔を賜り、光栄に存じます。この度、国境におき、野蕃なる隣国、マケドニヤと、小競合が生じまして收拾つかず、次第に大きく戦となり、我が軍、

苦戦と相成りました。お助けをお願いに行けと、わが山地党長老の命により、かく急ぎ参上仕りました」

執政長官 「なに、マケドニヤと戦端が開始されたと、容易ならざること。いま少し、詳しく話せ」

山地党隊長

「はゝあ、申し上げます。あの辺り国境と申しましても、御存知の通り定かではございませんが、そこに、大きな銀山のあることが判り、これが両国小競合の種となりました。この度、わが山地党、一挙に制圧せんものと、大兵を率いて銀山確保を企りましたが、敵もさるもの。多数の兵を返して、大戦闘と相成りございます。わが軍旗色悪く、じりじりと追われ、今朝の戦闘で、勇士数名を失う次第と相成りました。

何卒、何卒平原党におかれましても、偏ひとへに、偏に御援兵のほどを、お願い申し上げます」

執政長官

「うむ、大きな銀山のこと、聞いてはおる。銀山の取りっこじゃな。それで、敵味方、兵の数は如何ほどか」

山地党隊長

「はつ、敵兵およそ百。わが方、六、七十名ばかり」

執政長官

「はて、山地党の兵は、それ程に、多勢いたか？」

山地党隊長

「はい、この度、奴隸を少々手に入れてございます。その上に、海岸党から、一個小隊の応援がございます」

執政長官

「なに、しかと左様かっ！」

山地党隊長

「はつ、左様でございます」

執政長官

「山地党の小競合ならとも角、海岸党が嚙んでいるとは出来心ではないな。前々よりの算段よの。第一に、我が平原党を無いがしろにしておる。第二に、銀山が手に入らば、山地党と海岸党で分配する存念、であったよな。第三に（一等禰宜に向い）禰宜、この戦いを始める時、山地党より御神託を受けに来たりしや、どうじゃ！」

禰宜、一瞬沈黙、

一等禰宜 「いや、あ、いえ御神託はお受けに参りませ、なんだ」

隊長と従兵、気付き平伏、

隊長と兵 「はゝっ」

執政長官

「それみやれ、かゝる大事に、御神託すらお伺いせず、わが党の承諾も得ず、

戦を企るなどもつての外。平原党より、一兵たりと、援兵まかりならぬわっ！」
再び、沈黙。

執政長官、山地党隊長と一等禰宜をじろり睨み、輿に乗ろうと行きかける。隊長が、
必死で縋りつく。

山地党隊長 「しばらく、しばらくお待ちくださいませ。その責、如何様にもお詫び仕まつりませすれば、この度のみ何卒、何卒御寛大な御処置をお許し下さいまして、御援兵の程を願わしゅう存じます」

執政長官 「ならぬわっ！」

○禰宜、膝をつき、

一等禰宜 「執政長官殿。御神託をお伺いもせずいたしたと、執政長官殿のお許しも得ず兵を起したと。正しくございません。その処、私からも、深くお詫び申上げます。只今聞けば、山地党、海岸党、危急の時にござりまする。

これが、万に一つ！敗れし時、敵は、雪崩うち、この地を蹂躪するは必至。フォキスあげての戦乱となるは必定、これを如何に！今、敵を喰止めるが、上策と存じ上げます」

(禰宜、執政長官に向い)

一等禰宜 「執事長殿！貴殿も左様にお考えでないですか。今は平原党においても危急の時、ご一緒にお執り成しを！」

執事長 「うむ、そうだな。左様に相成ると、面倒になる」

(執事長、執政長官に向き直り)

執事長 「執政長官殿、このところは、援兵を差向けるが、よろしいと存じます。

山地党等の追及は、何時、如何なる時にも出来る、内々のこと」

隊長、此の時とばかり、

山地党隊長 「この通りにございます。何卒お怒りをお鎮め下さい。御援兵のほど！御援兵のほどを」

従兵共に、何度も平伏、

執政長官 「左様のこともあろう。よしつ、援兵を差向けよう。だが言っておく。この処罰は、後日、嚴重に吟味の上でいたすぞ。また、銀山を手に入れることが出来たら、それは平原党の功績によるものであるから、フォキス・ポリスの所有ぞ。よいか！」

山地党隊長 「はゝあ、御意のまゝ」

執政長官、執事長に向い、

執政長官 「そなた、直ちに神殿へ参内し、急ぎ御神託を拝受せよ。御告げは直々に、

枢密女官が奉じて参れと申せ。よいか、すぐ行け！」

(衛兵一人に向い)

執政長官 「角笛を吹き鳴らせ。この辺りの兵のみなり、すぐ集めろ」

随行の衛兵が慌しく手輿を長官邸へ戻す。

○執事長は衛兵一人を連れ、参道を急ぎ登る。もう一人の衛兵が、上手に走り下手に走り、角笛を吹き鳴らす。

○先の随行兵を含め、平原党の衛兵が邸庭で武装準備を始め、俄かに緊張、

一等禰宜 「それで戦況はどうだ。優秀な奴隷を七、八人も買ったと謂うではないか。

その者たち、働きおったか」

山地党隊長 「はい、昨日の夕刻より形勢不利となり、領内深くまで追し込まれました。

折に、買入れた奴隷もよく奮戦しておりましたが、乱戦ゆえ。かの槍名人、残念に、討死いたしました」

一等禰宜 「そうか、あの精悍な勇士か。戦死しおつたと。エデホースは、どうじゃ。

まだ無事でおるか」

山地党隊長 「はい。あれは無事で、奮戦しております」

一等禰宜 「あの男、並でない。使い道あるからな。いざいう時は全軍の指揮が出来る。

その力量、十分持つておる。あいつの奮闘を随分と期待しとるのだ。よいか！

奴の扱い方、間違えるな」

角笛、再吹聴。武装兵が三々五々集まる。奴隷兵を従えた者、家の子郎党を連れた精悍な勇士、いづれも槍と楯を持つ。

野良から鍬を持ち飛んできた者は長官邸前でゲートルをつけ、前庭にある短槍と楯を物色する。槍の穂先を調べ手入れする者など、騒然。山地党の二人を含めて十人ほど。

○執政長官が兵を召集、正面へ。

執政長官 「よしつ。先遣部隊だからこの程度でよい。お前に前衛隊長を命ず。お前に

副隊長を命ずる。即刻、出動の準備をせい！」

任命された隊長、副隊長、直ちに兵を整列、号令をかける。

前衛隊長 「気をつけエ、これより執政長官殿の御訓辞がある」

執政長官

「今回の非常召集は、山岳地帯で戦闘が開始されたことによるが、相手国はマケドニヤ、兵力は、百名ほど。わが方、山地党と海岸党の兵、七十名ばかりにて、この程、苦戦に陥入り、わが平原党も、出動するの止むなきに至った次第である。

先づ諸君に、前衛隊として出動してもらいたい。兵糧兵站はすぐ差向ける。

次いで一大隊を即刻出動さす。大隊が到着しの中に、敵兵を国境より追払い、技術者ともに銀山確保、銀山関係者に危害はならん。安全を保障せよ。

フォキス・ポリスの名与にかけて、一歩も退くな。前進あるのみ、よいか。

案内は、この山地党隊長が勤める。隊長は常に情報を集め、わしの処まで逐次報告を怠らぬこと。よいか」

前衛隊長

「は、っ、戦いの目的、わかりました。フォキス・ポリスの名与にかけて、一歩も退かず、前進あるのみ、必死に戦うことを宣誓します。おわりっ！」

●上手参道より執事長一行に護られた優美な女輿が到着。衛兵四人が槍を片手に長柄を提げる。中央に降され、長官の長女、ピュティアが現れる。白絹の長い神衣。御神託の入った白木の函を執政長官に献上す。この間に輿は邸庭へ。先の衛兵の内二名、前庭の盾を持ち出し、急ぎ前衛部隊へ加わる。

執事長が函を拝受し、一等禰宜が函の蓋を開ける。長官が神託を取出す。一等禰宜が函を執事長から受け、捧げる。御神託は美濃紙（所謂B四版和紙）大の紙。

一同、膝をつき沈黙。

執政長官、頭上に奉じ拝礼して後、徐ろに開き読み始める。

執政長官、大声で神託を二度朗誦、

『御神託』

【將軍有異聲】

將軍異声あり

【進兵萬里程】

兵を万里のていに進む

【争知臨敵処】

いかでか知らん敵に臨む処

【得勝且道平】

勝を得て道平らなり

執政長官

「うむ、大吉である。この將軍異声ありと謂うは、大変優れた人物が出でて、その勇者の指揮によって、大勝利を得るということ。後の三句はその理よ。即ち、兵は万里を進み、氣勢、大いに揚る。戦争は、勝負の判らぬものだが、

最後には勝利を得て道平らなり。道平らなりとは、良い結果に終る。と申すことよ。これは有難い。有難い御神託なるぞ」

執事長 「誠に有難い御神託にございます」

一等禰宜 「おゝ有難い。これは平素の御奉仕によるものぞ。執政長官殿、萬々歳を」

執政長官 「うむ幸先きがよい。萬歳三唱！」

(執事長が音頭を取り、周り一同、萬歳三唱)

執政長官 「諸共、進めっ」

前衛隊長、執政長官に対し、

前衛隊長 「一同敬礼っ！それでは、行って参りますっ」

(山地党の隊長に向い)

前衛隊長 「山地党隊長殿、ご案内頼む」

(兵一同に向い)

前衛隊長 「一同、出発あつ、駆け足っ！」

○山地党隊長を先頭に、兵一同参道を駆足で下る。これを見送り、

執政長官 「執事長、兵糧兵站、大隊召集、急いでいたせ！」

執事長 「はゝあ！」

(残る衛兵、二人に向い)

執事長 「それ、第一の狼煙だ。狼煙をあげえ、武装せよの合図だ。鐘を鳴らせい。

そして、暫く間を置いて、今度は、第二の狼煙、即時集合の合図だ。集まれの鐘を鳴らすのだ。よいか、判ったか。すぐ行けいっ」

衛兵二人 「はっ、はあ！」

衛兵二人、執政長官邸の前庭へ駆け登り、一人狼煙台へ登り狼煙をあげる。もう一人吊鐘をじゃんじんと三打刻みで叩く。狼煙台から『戦闘態勢』の黒煙が立ち昇る。

執政長官 「うむ、これでよい。一と休みして、策戦の詮議を致そう。」

(ピュティアに向い)

執政長官 「お前、一と休みせぬか」

ピュティア 「はい。どうぞお先きにお越し下さい。すぐ参ります」

ピュティア、丁寧にお辞儀。執政長官はイソップを一瞥、頷く。執事長、一等禰宜を従え邸へ入る。

●衛兵が一人、ピュティアに従い手函を捧げる。

ピュティア、道端草陰に平伏する二人に近づき、

ピュティア 「イソップ様」

(イソップ、頭を上げ、驚き、慌て平伏する)

ピュティア 「あなた様のお話、それは何時も楽しみです。うす暗い御神殿の中、お暇を見つけて拝見しております。とても面白く、早く次ぎが読みたくなります」

イソップ 「は、はい、有難いことでございます。デルフィ神殿枢密女官のあなた様が、わたくしのような者が書いたものを、ご覧くださるだけで、有難くもったいないこと。有難うございます、有難うございます」

ピュティア 「次ぎのが出来ておりませぬか。出来ておりましたら、少し拝見させていただけませんか」

イソップ 「はいっ！少々書き溜めて。只今持って参りますので。ちよいとお待ちくださいませ」

イソップ、嬉しそうに、運勢占屋の小さな家へ稿を取りに走る。その間にピュティア、ロドーピスに向い、

ピュティア 「ロドーピス様。お噂ようく伺っております。この頃、御神殿前広場で舞われる御姫は、エジプトで勇名を馳せたヘタイラ。聖母とも慕われる御舞姫、その舞は神技と。先日、皆さまの歌舞を、拝見させて頂きました」

ロドーピス 「なんと！お目に留まりました……お恥ずかしゅうございます。私どものような、しがない一座。お言葉を頂戴し、この上ない、仕合せでございます」

イソップ、草稿を抱え、戻り平伏。ピュティアに稿を献上する。

イソップ 「十ばかりございます。稿も改めず、大変お見苦しい有様。何卒ご容赦頂き、ごゆるりとご覧下さいませ」

ピュティア 「有難う。拝見させて頂きました。あつ、そうそう」

(衛兵を呼び、手函から大事に、写本を取り出す)

ピュティア 「これ、アテネのペイシス様……ご存知でしょ？あのお方の事。詩歌や歌舞、演劇を大変奨励されておられます。今度ホメロスの詩篇を編纂なされました。それはそれは、雄大な叙事詩。トロヤの戦争物語、長編です。英雄や勇士、恋がある、悲劇がある。興味の尽きない詩篇です。これはほんの初め、ごく一部でございます。一度、お目を通して下さいませ」

イソップ 「ほおう、これが、かの高名な叙事詩。一つの物語でございませうか」

(ばらばらと頁を繰って)

イソップ 「これはまた……ずい分と長うございますな。はい、有難く拝見させていたゞきます」

イソップ、写本を押しいたゞく。

ピュテイア 「それは、ほんの初めです。後が手に入りましたら、直ぐにお届け致します」

ピュテイア、二人に目礼。衛兵を従え、執政長官の邸に入る。

●イソップとロドーピス、あとを見送る。

ロドーピス 「本当に気さくな、ちよつとも様子をしないゞお方。さばさばされておられます。わたくしに、お言葉を下さいました」

二人、オリーブの木の下へ戻り、イソップは詩篇を開き黙読。やがて朗誦、

イソップ 『女神よ歌え。ペーレウス、アキレウスの瞋しん。アカイアに、大禍たいかを来きたし。幾許ここだの勇士、猛たけき魂、冥府めいふへ投なげず。その骸むくろ、犬鷲いぬわしどりの餌なと為なせし。斯かくてゼウスは、満みたされき』註

イソップ 「なんだこれは、重厚な詩。これが……大長編か、くっそ！」

(写本をロドーピスへ渡し、暫し呆然。ロドーピスは黙って読み始める)

イソップ 「焼けた砂漠、死に兵の武器を拾い、懐中物を探って荒れ狂った。東国の坊さんは、乞食をしながら詩書を誌した」

●アイドンが参道から帰る。占屋を見ると、イソップ噛みつく、

イソップ 「アイドンさん、わしを判断所で使ってくださいっ！」

アイドン 「やれ、その気になってくれたか、有難い。あんたが判断人になれば、間違いなしじゃ」

二人、手を握り合う。

イソップ 「代りに、上りの三分の一をくださいや」

アイドン 「そりゃ、もちろん積む。しっかり稼いでおくれよ」

イソップ 「おゝ稼ぐ！稼ぐとも」

ロドーピス 「よかった。安心してお稼ぎなさい！」

●二回目の白い狼煙が、狼煙台から立昇る。『即時集合』の合図、打鐘は二打刻み。上手下手の参道から、武装兵が集合し騒然。

アイド
「如何？戦争か？イソップさん、稼ぎ時ぞ！これから、いろんな人が御神託を伺いにくる。何処へどう逃げたら？食糧をどうすればと。勝てば勝ったで、何が儲かるか伺いにくる。忙しくなるぞ」

イソップ
「稼ぐかあ！」

ロドーピス
「その調子！彼処、大部隊が駆け付けてきましたわ！」

静かに幕――

- 「エチオピア人でアイソポス↓『焼けた顔の人々』Aethiops を詰めて Aesop とする『伝承』。
- ⊚ 浅草寺観音御籤↓第七十二・吉。家内に気を配り和合せよ。
- ⊚ 世の中をすくすく渡れる↓のびやか・すこやか。「すいすい」に比し否定的な含意がない。
- 宮沢賢治『鳥の北斗七星』に例がある。
- ⊚ トラケーン→トラキア。ギリシヤの殖民地で当時の奴隷供給元。先住民のため言葉が異なる。
- ⊚ アマシス王↓古代エジプト第二十六王朝イアフメス二世。『ロドピスの靴』で、ロドーピスはアマシス王妃となる。
- ⊚ ロドーピスが建造↓ヘロドトス『歴史』二卷134-135で否定されている『伝承』。
- ⊚ 浅草寺観音御籤↓第二十六・吉の結句『道勝却虚名』|| 目的を達しても無駄なことになる↓『得勝且道平』|| 勝を得て道平ら、へ改変。
- ⊚ アテネの。ペイシス↓ペイシストラトス。口承されてきたホメロス断片を編纂しテキスト化。様子をしなない↓身分、立場の在り様(体面)を気にしない様。
- × 瞋↓しん・瞋恚(しんい) 怒り。三毒(貪欲・瞋恚・愚癡)の一つ。煩惱(五蓋)に包含。
- ⊚ 幾許↓ここだ(く)、おびただし。
- ⊚ イーリアス冒頭、ムーサ(Muse 詩神)への祈り↓土井晩翠(1871-1952) 訳版を底本に、七五調に改変した。

■ 第三幕 古代ギリシャ・フォキス・ポリス（地区）

『デルフィ神殿前の広場』

◎場所・デルフィ神殿と前の広場

@正面、数段の広い石段がある。壇上がデルフィ神殿の境内となり、正面奥、白大理石円柱建築の荘厳な本殿が構える。その右手前には社務所が構え、左手に衛兵の詰所がある。その奥本殿左横は官舎、右社務所の奥には七つの宝庫が並ぶ。

@石段下は広場になる。下手参道側から順に、新規開業の『神託判断所』、運勢占屋アイドンの掛小屋、舞姫ロドーピスの天幕張り小控えが続き、次に小さな露天商が一つ。石段を挟み上手に掲示板がある。

『―戦勝聖餐会開催―

今夕、神聖競技場において、戦勝大聖餐会を催す

ポリス民は参加の上、大いに歓を尽し、戦勝を祝われたし

デルフィ神殿社務所』

と、貼紙がしてある。

その右に露天商が一つ、続いて『神託判断所』が三軒並ぶ。いずれもよしず張りの、古風で鄙びた掛小屋である。

@神殿広場の右下、神聖競技場（以下競技場と記）に旗柱が林立、先端のみ見える。旗が二つ、風にはためく。そこへ降りるのは、上手からの小路だけで、だらだらの下り坂になっている。

@石壇上、両角に衛兵が槍を捧げ佇つ。デルフィ神殿の遠景は、赤茶けた絶壁である。その絶壁は右へいく程、遠く低くなり、上部は青草の繁る高原が広がっている。

■ 開幕

―セイキロスの墓碑銘―

●ロドーピスの弟子、舞妓二人が錫杖^{シキウ}を手に舞い歌う。ロドーピスとスイ・レンは、横笛と堅琴を手に天幕前で調子をとる。舞妓二人は杖で拍。大勢の人が見物する。

@二人の舞が終わると、スイ・レンの独舞。歌と調子は舞妓二人。ロドーピスは箆を手に持つ。舞の流れに合わせ、見物人に愛嬌を振りまきながら、銭を集めて廻る。

@この間、巡礼がちらほら、下手参道から石段を上り、御神託を拝受して下向する。多くは、アイドンの掛小屋へ入る。右側の三軒並んだ判断所へ入る者はない。

@アイドンの神託判断所のみ繁昌、行列の有様。イソップ、アイドンが並んで坐り、熱心に商売するが、イソップを隠す余裕もない。

戦勝祝賀会ゆえ、地主、百姓、商人、地元連中が繰り出し、巡礼に混じりロドーピス一行の歌舞見物などして、広場は下手付近のみ雑踏が激しい。

地主 「やあ、あなたもご見物か。大祝賀会と聞きましたよ」

百姓 「目出度いことで。今晚は夜つびて、飲みましような」

商人 「さつきわし競技場を見してきました。先発隊が帰っております。皆な戦塵まみれ、昂奮しておりましたがな。本隊も、おっつけ帰るころでしょう！」

百姓 「その本隊、高原道を通って難儀な坂から戻るそうですね。まあ近道ですからのお。今夜は御神殿の大盤振る舞いですとな。大いに、頂きましようや」

スイ・レンの舞踏が一段落。此の三人と、巡礼が少々散る。神殿境内へ上り、下の競技場の光景を眺める者もいる。

●広場上手の掛け小屋から、判断人が一人出てきて、

判断人1 「あいつらが判断所出してから、商売上がったりよ」

と、他の小屋へ呼ぶ。判断人ぞろ出で、

判断人2 「昨日も言いたが、こつちにはお客が一人も寄りつかん、飯が食えん。この

まゝだと食い詰めちまう」

判断人3 「こゝ二十日ばかり一銭も実入りがない。今日び書入れ時に、お客が一人も来んと、どうすりゃいい。我慢ならん！」

判断人2 「わしや、もう無理だ」

判断人3 「わしもお我慢でけん」

判断人1 「やっちまうか、ああ？」

判断人2 「うむ、やっちまおう！」

判断人3 「うおゝ、やっちまえ！」

○判断人三人、ばらばらと駆け出し、下手アイドンの掛小屋を壊しにかゝる。

アイドンをイソップ、襲撃に面喰らいつも、よしずを簀巻きにして抵抗、巡礼が散る。

舞姫一座、小控えの天幕ごと巻添えを喰う。舞妓二人が錫杖を手に反攻。乱闘が始まる。

判断人2 「このくそ、馬鹿もの、立ち退きやがれっ」

イソップ 「なにをお、ふざけるなあ」

判断人3 「なんだと、このカタリ！ぶっ壊したる」

アイドン 「カタリとは失礼な！お前たちなんぞに壊されてたまるかあ」

露店商二人が判断人に加勢、男五人。小控えを立て直した舞姫二人、舞衣の袖に付けた金剛輪を手にアイドンへ味方。乱闘、艶やかな乱舞。

石壇上から、衛兵二人が仲裁に駆けおり、

衛兵1 「静まれ、静まれ！」

衛兵2 「今日を何と。目出度い聖餐会の日ぞ。静まれ静まれ」

衛兵1 「今日は戦勝お祝い日だ。内輪で争うでない。静まれ」

声高に呼ぶも、舞姫一座は収まらず、收拾付かない。

巻添えを喰った巡礼一人が社務所へ報せ、一等禰宜が出てくる。

○一等禰宜、石壇上から、大音声に呶鳴る。露天商が逃げ散る。

一等禰宜 「馬鹿者！静まれ！今日を何と心得おるか、静まれ！」

争いが収まりかける。一等禰宜、石段を下り中央へ。判断人たち上手、アイドンたち下手に分れる。

アイドン、昂奮の態、

アイドン 「一等禰宜さま、こ奴らが、不意に、こ奴らが、訳も言わずに、こ奴らが、

わたくしの小屋を、襲撃してきたのでござります」

一等禰宜 「しかと、その通りか？」

判断人一同 「……………」

一等禰宜 「わけを申してみよ」

判断人1 「それが、その……………」

一等禰宜 「ああ？謂えないか」

判断人1 「こ奴っ！アイドンの小屋で働いておる、イソップは、奴隷にございます。

奴隷如きに御神託を扱わしてよろしいのでございますか」

一等禰宜 「なにを馬鹿な、この神聖なデルフィ神殿の御神託を、奴隷などに扱わせて

よいものか」

アイドン 「違います、違います。イソップさんは、わたくしの手伝いだけで、御神託

そのものは一切扱っておりません」

イソップ 「はい、その通りで。ただのお手伝いでござります」

一等禰宜 「うむ、その通りであるな」

(判断人三人、に向い)

一等禰宜 「するとどういう理由で、そち達は小屋を壊しにかゝった。あれなる小屋は、先日、前の年寄りの株を買ったので、許可しておく」

ロドーピス 「禰宜さま、このアイドンさんの小屋が、よく流行るので、あちらの方々が、やっかんだのでございます」

一等禰宜 「なに、ひとの小屋がはやるを、こちらの者どもが、やっかんだと申すか」

ロドーピス 「はい、左様でございます」

一等禰宜 「やっかんで、他人の小屋を壊すとは不届きな奴じゃ。たゞでは許さんぞ」

判断人2 「それがその、おまんまにかゝりますことぞ」

判断人1 「生活権確保のためでございます」

イソップ 「生活権なら、こちらも同じことじゃ！」

アイドン 「わしは、こゝで始めて間もないのに、それを、はやらないと謂われても

それはその、腕……」

イソップ 「腕がなくては、仕方ないかのお」

判断人三人、歯ぎしりも、沈黙。

一等禰宜 「うむ、様子は判った」

(判断人三人、に向い)

一等禰宜 「お前たち、やっかんでやったようじゃな。ならば、壊した小屋の弁済は、当然。よいか、しかと申し渡すぞ」

判断人三人、ふくれっ面、

一等禰宜 「なお、かゝる騒動を再び起こした暁には、双方とも、判断所の許可を取り上げる。よいか、以後つゝしめい」

アイドン 「確かに、謹んでお受け致します」

イソップ 「安心いたしました」

ロドーピス 「公平な、お裁き、有難うございます」

一等禰宜 「そち達、とりあえず、小屋をなんとかしろ。三人残れ」

●アイドソン一行、小屋へ引き上げる。早速巡礼が寄ってくる。とっ散らかった小屋を一応程度にいそぎ直し、商売にとりかゝる。

一等禰宜 「お前たち、他人の商売をやつかんで力に頼るとは、もつての外。以後つゝしめい」

判断人1 「はい、以後、謹しみますでございますが」

一等禰宜 「なあんじゃ」

判断人2 「いや、その、禰宜さま、実は、お願いが」

(揉み手し、懇願)

判断人2 「あの、あ奴つ的小屋ばかりはやりまして、こちららはさつぱり。お客さま一人ない日が続き、その日のおまんまに、事欠く仕儀につきまして、つい。かつと、でございます。お許しくださいます、何卒、我々をお助けいたゞけないものでござりましょうか」

他の判断人たち、

判断人二人 「その通りでございます。何卒お助けを、お願い申し上げます」

と、揉み返す、

一等禰宜 「助けてくれとて、はやらぬものを、何をどう。助けようがあるまい」

判断人1 「いえ、ござります。只今アイドソンめ、イソツプに、御神託の判断をさせていないと申しありますが、ありや嘘、大嘘！イソツプがやつてるから、はやります。何処の生れか存じませんが、おそらく他国者、異教徒。その上奴は、奴隷でございます。何卒、お助け願わしゅう」

一等禰宜 「はあん、異教徒とな？ふむ、奴隷か？よし。ああ……少し待て、なんとかなるかもしれんな」

(判断人の前を離れながら)

一等禰宜 「あ奴は怖ろしい。ガマのような面格好。馬鹿にしてかゝると、いきなり錐が出てくる……わしらの計略も見抜いてるやも知れん。イアドモン達の話、奴は、そう、近くに倒れておった筈。国外追放、それとも、あれか。とにも角にもこの機会、逃せぬな」

(判断人のところへ)

一等禰宜 「よいか、お前達。これは奴隷といえども、人の生死にかゝることぞよ。

かよう大事を決めるに、確たる証拠がなくてはならぬ。お前達、その証拠、しかと握って、申出ているのであろうな」

判断人一同 「えっ？ 証拠」

判断人1 「それは？」

一等禰宜 「ああん？ 証拠なしに何が出来よう。お前達、証拠を握ってから申し出よ。証拠があれば、今日、只今にても、処分してつかわす」

判断人1 「は、はい、ご尤でございますが……奴隷と謂うことも異教徒、謂うことも、よう判つとります。この上の証拠と申しますと？」

一等禰宜 「馬鹿者！ 揃い揃って、あぁなんと……よくまあ御神託の判断など、お前らよくぞ威ばつておつたな。あゝ、勿体ない限り。勉強して出直せいっ！」

判断人一同 「へいっ」

一等禰宜 「彼奴のやつとる判断なるもの、異教徒の解釈かそうでないか、この一点に尽きる。大事なところぞ。お前方の御判断とやらも、相当にあやふやなのではないか？ ふふっ、怪しいもの」

判断人1 「いや、滅相もない。真剣にいたしております」

一等禰宜 「ふん、まあよい。証拠を握る、その方法は、だな。お前方の誰れか一人、巡礼に化け、御神託をお受けし、それを、あの小屋へ、お伺いにいけばよい。そして、判断を聞くのだ。正しいか正しくないか、すぐ判る。生きた証拠となる。どおよ？」

判断人一同 「ううむ、なるほど」

判断人3 「よし、受けた。わしや、やつらと付合いがない。まだ顔もよう覚えられとらんはず。好都合じゃ、やろう！」

判断人、口々に、

判断人二人 「頼む、是非やってください」

判断人3 「任せろ！」

●石壇上の上手衛兵が、大声で呼ばる、

衛兵 「おうい、凱旋じゃ！ 本隊が凱旋しましたぞお」

広場一同 「うおおう！」

辺りは、我先に石段を駆け登る。判断人は、目配せしながら散り失せる。禰宜は従兵

を連れ、社務所へ急ぎ消える。

神殿壇上の上手、人が群がり、下の競技場に向い、手に持つものは何でも振る。

ロドーピス舞姫一行は奴隷ゆえに石段上へ登れない。掲示板の横から競技場を眺め、これも万歳で歓待、ひとしきり昂奮の態。

地主 「今のは、平原党の一中隊と二中隊。それ、旗印ですよ。おおつ、三中隊が見えた。万歳、万歳！」

百姓 「そりや山地党の凱旋だ、皆いんな砂ほこりだらけ、勇壮なもんだあ。見ろ！

あんな血まみれ、うおりや、万歳！」

商人 「海岸党も帰ったぞ。堂々たるもんよなあ……有難う、有難う。皆んなよく

戦ったぞ、よっしゃ、万歳！」

見物人は更に昂奮。小中隊帰還の毎、隊旗がするする揚がり（観えるは旗頭のみだが）競技場は景気がよい。

地主 「おお競技場が一杯。これは……」

百姓 「さすがは、アポロンさまの神軍、有難い。大勝利、あつたり前よ！今日は

夜通し、お祝いの無礼講といきましょうか」

商人 「營火も夜が明けるまで燎かるとか。呑んで踊って、乱ちしますか」

百姓 「そろそろ、祝杯に預かりましょ」

地主 「うむ、一杯いただきますか」

○此の三人、上手競技場の小路を降る。間もなく、伝令兵が駆け上り、声高に呼ぶ、伝令兵 「只今より、凱旋兵代表のお礼詣りがあり、論功行賞があります。次いで、

今回の戦いに於いて一番の功労者に、感謝の授与があります。皆様、境内を

お浄めくださいませ」

群衆は蕭々と壇を下がり、広場端々で待つ。石壇上から衛兵が手早く境内を浄める。

競技場より、戦塵まみれの勇士四名が威風堂々入場。続いて山地党長老、海岸党長老。

最後に奴隷服ゲートル履きのエデホースが同じ歩調。一人、貫禄並び無き男。

勇士、境内壇上に整列。隊長号令下、本殿に向かい敬礼後『廻れ右』。エデホースは奴隷のため、石段下で最敬礼のまゝ直立。本殿を向き独り立つ。

続いて、社務所より執政長官が出席。執事長と、手函を捧げた一等禰宜が随行する。

海岸党、山地党の長老二人は、石壇上の下手に控える。

勇士達、前衛隊長の号令『半ば向け左』にて、執政長官へ最敬礼。

○執事長、威儀を正し、

執事長 「これより、執政長官殿の、御訓示がある」

執政長官も、威儀を正し、

執政長官 「御苦勞であつた。我軍の勝利は、これ偏にデルフィ御祭神の御啓示。且つ！

貴君達が、生命を的に戦つた賜である。わが御祭神もお喜びあり、嘉し給うよみたまであらう。我々は、貴君等の奮戦に、感謝する由しにある。勝つて兜の緒を締めよと謂う。後も奢らず、油断なく武技を練り、フォキス・ポリスの富強を計り、以つて、御祭神のおん恵みに応え、奉らん。それでは、万歳三唱！」

執事長が音頭。見物人を含め、万歳三唱。

執事長 「それでは、この度の論功行賞に入る」

続き、表彰者の功勞賞と名前を奉じ、次に褒賞を読み上げる。

執政長官、一等禰宜が捧げる函より、順次勲章を取り挙げ、呼ばれた勇士、一人一人の頸に奉じる。

『矢車草 ディオソ大隊長（平原党） 一等勲章

同じく ゲリトン前衛隊長（平原党） 二等勲章

オリーブ リュコン隊長（山地党） 一等勲章

同じく メレトス小隊長（海岸党） 二等勲章

なを、右勲章の外、所定の年金を支給する』

執政長官、次に一等禰宜の捧げる函より、勇士に年金目録を授与。

執事長 「次いで、今回の戦いに於いて大功ありし者に、月桂勲章を授与致します。

どうぞ、こちらへ」

長官を案内、石壇上前端に進み随行が続く。その間、勇士達は大隊長号令下、本殿に向かい敬礼。石段下の掲示板側に進み、見物人を向き整列。

執政長官、執事長から感状を受け、壇上より読み上げる。

エデホース、石段下で膝をつく。謹しみこれを拝受する。

『——感状——

山地党奴隸

エデホース

この度、銀山の戦に於て我が軍の戦況不振の折り、よく独り奮起し、全軍の先頭に立ち、戦を有利に挽回。以つて敵軍を粉碎し、全滅せしめたり。

その功や誠に顕著たり。よつて茲に、月桂勲章を授与し、後々までも功績

と栄光を称えるものである。

フォキス・ポリス

執政長官—M.A.アントニオン 』

○次いで執政長官と長老二人、従者一行が石段を降る。執政長官、執事長より勲章を受け、エデホースの頸に奉ず。感状を授与、且つエデホースの手を握る。

執政長官 「よくやってくれました。厚く御礼を、申します」

エデホース 「はゝっ！お褒めを賜り、大変に有難く存じます」

再び膝をつき応える。

執政長官 「そなた、ロドスの一城主であったと伺うが。成程、うなずける。世が世なれば、客人としてもてなす御仁。運は計り知れんもの。気宇^{けう}を小さく持たずに、今後とも勤めて頂けますか。その内によいことも、あると謂うもの。何かもう少し、計りたいのですが、お望みはありませんか」

エデホース 「はゝあ！有難きお言葉、冥加^{みょうが}に尽きます。奴隸になり果てましたのも、わが身の運。これと申す望み、ござりませぬが、たゞ」

執政長官 「うむ、遠慮のう申うされませ」

エデホース 「私めに、一人、娘がございます。今は売られ、女奴隸となりてございます。叶うことなれば、この娘を手元に。こればかりが、わたくしの願いにござりますれば、どうかお計い下さいますよう、偏にお願い申し上げます」

執政長官 「姫がおられるか。さも、姫御と棲みたいは親心。然し、それは少し、むつかしかりましょう。姫御のありかが、判るまい」

エデホース 「はい、偶然と申しますか、アポロン御祭神のお引合せ、御神殿前の広場におるのが、判りましてございます」

執政長官 「ん？なに、こゝにおる？」

エデホース 「あれなる、天幕近くの舞姫が、左様にございます」

○姫スイ・レン、天幕前で膝をつき、深々とお辞儀。そこだけ人垣が開き、執政長官の眼に入る。

執政長官 「うむ、あれか？ああ可憐、清楚な……御祭神も、粹じやなあ。ああ、よい。

この御恩忘るまいぞ。暫し、お待ちください」

執政長官、山地党の長老、執事長、一等禰宜等を呼び寄せて、暫時協議。やがてエデホースに向い、

執政長官 「今、皆と相談した。山地党長老殿も、承知された。姫御を手許へ引取れるよう、計うとのことだ。なお、この戦で手に入れた、あの大銀山。地区一帯、守りを固めねばならない。その要塞造り、地区一帯の守備、そなたに委せると決まった」

エデホース 「誠、誠に有難き仕合せ！」

スイ・レン、嬉し涙。

山地党長老 「要塞造営奉行、守備隊長。そなたを任命すると、有難いお言葉。よいか、今後ともしつかり頼むぞ」

エデホース 「はい、この身に余る幸せ」

執政長官 「辞令は直接に手渡します。そこで姫御とご一緒になされませ。さて今宵は戦勝聖餐会、充分に歓を尽されよ。おおそうだ。その席上で、姫御の舞、見物させてもらうといたそうか。あつはゝゝ、のう山地党長老殿、めでたい。おめでたいこと」

山地党長老 「はい、誠めでたい。おめでたいことが、重なりましたのう。はっはゝゝ」

執政長官、執事長、一等禰宜等、声を合せて笑う。エデホース平伏したまゝ嬉し泣き。執政長官一行、長老その他を従え石段を登り、社務所へ消える。褒賞受賞の勇士四名は、大隊長の号令下、上手、競技場へと駆け下る。続き見物人達がわいわいと口々に、今の出来事を話しながら、競技場へ降りていく。

● 姫スイ・レン、小控え前から駆け出し、父にひしと縋りつく。

スイ・レン 「お、お父さま！」

エデホース 「お、おゝう……」

二人、抱き合い、暫く、

エデホース 「生きていてくれたか、舞姫になって」

スイ・レン 「はいお父上、もう何も。よくご無事で」

エデホース 「聞いたであろう安心せい。長官直々なる、間違いない。奴隸と謂えども、親子一緒なら忍べる。もうこれ以上ない」

スイ・レン 「本当に嬉しく。夢のよう」

また、父に縋りつく。

エデホース 「これで、お母さまさえ……」

スイ・レン 「もうそれはおっしゃらないで、お父さま」

エデホース 「そうであった、もう言うまい。せめてこれからは菩提を……よく葬ら^{はうむ}つてあげよう」

抱合う二人。

○そつと舞姫一行が近寄る。アイドンとイソップも、夫々、

『おめでとう、おめでとう』『よかった、よかった』と挨拶、

ロドーピス 「スイ・レンさん。よかった」

スイ・レン 「はい、おかげさまで。有難うございます。お父上、このお方、わたくしの、お師匠さまです！」

エデホース 「おゝ、これは。あなた様がお師匠さま。長い間、娘がお世話になりました、厚く御礼を申しあげます」

ロドーピス 「いえ、お礼など。おめでとうございます。わたくしも、やっと一心地つくことが出来ました」

エデホース 「皆様のご親切故にございます。其処な舞姫様方、お世話になったことでありましょう。御礼申し上げます」

舞妓 1 「この度は、おめでとうございます」

舞妓 2 「おめでとうございます。わたし達こそ、スイ・レンさまにお世話になりました。お姉さまのように」

舞妓 1 「お姉さま、もう泣かなくていいのですね」

暫し言葉を呑む、舞姫。

ロドーピス 「こゝでお別れするのは淋しいですけど。でも、こんなにおめでたいお別れなど、そうそう、あるものではありません。お互いに、元気で。笑ってお別れしましょうね」

エデホース 「まこと、そのようにお願い申し上げます。娘もまた、淋しいことでしょう。私共の居所はすぐお知せ致します。またお越し下さい。舞巡業は、大歓迎でござります」

イソップ 「スイ・レン姫さま、ようございましたなあ」

スイ・レン 「イソップさま有難う。お世話になりました」

イソップ 「いや、何が出来ましょう」

(エデホースに向い)

イソップ 「お殿さま、おめでとうございます。不可思議なこと。御祭神様のお引合せ、間違いなしです」

エデホース 「イソップさん、有難う。あんた元気で。あんたは書くこと。書いて書いて、詩人の名を残すことよ」

イソップ 「はい、それも中々にそうまいりません。わたくし奴隷ゆえ、何ほどのことが出来ましょう」

ロドーピス 「イソップさんは、長編が書きたいのでございます。わたくし、どんな援助も惜しまぬつもりであります」

エデホース 「左様ですか。落着き次第お知らせしますから、お越しくだされ。大長編が書けるように、ご援助いたします」

イソップ 「おゝ有難い。是非、お願い申し上げます。わたくし、この方の処で稼いでおります。稼ぎさえ溜れば、自由民になれます。その時はよろしゅう……」

アイドン 「左様でございます。わし処で、馬力かけております。あと半歳もすれば、自由民にございます。その節は、どうかお願い申し上げます。イソップさん、どんどん稼ごうのお」

イソップ 「稼ぐ、稼ぐ！太陽の陽が、こんな明るく！ああ」

陽を仰ぐ、イソップ、

エデホース 「そろそろ競技場へ行かねばなりません。皆さんまた、お会いしましょう。

どうぞご一緒に、参りませんか」

ロドーピス 「そうでした。わたし舞仕度が掛かります、後から参りますので。舞妓さん、

スイ・レンさん、どうぞ先きにお越しくくださいませ」

スイ・レンと舞妓二人、天幕に駆け込み舞道具を手に跳び出す。エデホースの前後を飛び跳ね、嬉々と競技場へ降りていく。

それを見届け、神殿衛兵が社務所へ下がる。イソップとアイドン、自分の小屋へ戻りあと片付け。頭が見え隠れ。

@少し薄暗く^{8/8}（都合八回減光）、辺りに人影なし。

●一等禰宜、見廻りに石壇の上で一人で立つ（衛兵もない）。

下手参道から、イアドモンと奴隷頭。天幕よりロドーピス、着替えて出る（舞化粧、白絹の長袖、長裾の舞衣装）。

一段と神秘的。出会いがしら、

イアドモン 「やいロドーピス、美しくなりよったな。その立ち姿、聖餐会でも引立つというもの。お主ほどの美麗は、おらんのう。眼福眼福、舞が楽しみじゃ」

奴隷頭 「今宵は稼ぎ時。稼ぎまくれな」

ロドーピス 「はい、大いに稼ぎます。その代りにね、親分さん。今夜、祝賀が済んだら自由の身。よろしいですね」

イアドモン 「おおよい、よいとも。清算してやるわ。それでお主、この先きも、旅か」

ロドーピス 「はい、流す外ありません。続けるつもりですけど、思いきって。殖民地と
思ってます。イタリアのチレニア。開拓民を鼓舞したいと、思っております」

奴隷頭 「ああ、殖民地か。お主のやりそうなことだなあ。士気を鼓舞すると。で、皆な連れてくのか」

ロドーピス 「はい。舞妓さん二人、お連れします。あのお二人とも身代金、溜っている筈ですよ」

奴隷頭 「大ありじゃ！心配ない、あれ？スイ・レンはどうする？」

ロドーピス 「スイ・レンさんは残ります」

イアドモン 「ん？残る……」

○イアドモンと奴隷頭、不審顔を見合せ。一等禰宜の手招きに応じ、二人、その方へ歩いていく。

ロドーピス 「では、お先きに」

と言つて、競技場へ降りていく。

一等禰宜 「イアドモン、スイ・レンは、山地党の長老が買取ることになったぞ。おい、ちよいと手数料出せ。高く、売りつけてやる」

と、小声。無頼漢ぶった、悪党仲間の態。

イアドモン、辺りに目をくぼり、

イアドモン 「よろしゅうがす、所詮売り物じゃ。高値に売ってくれるなら。さてと……百と六〇ドラグマというところかな。あんたに、委かせますよ。来年のこともあるでな」

一等禰宜 「よし、百と六〇だな。半分は、おれに寄せ、いゝな。で、イアドモン。例の銀山のことだがな。あれはフォキス・ポリスの財産となつて、執政長官の管理となつてしまった。それで、ちよいと弱つとる」

イアドモン 「そんなことなら百も承知、くよくよすることはない。その後、確かめたが、

山地党と海岸党、結束は固い。執政長官はこっちのもんじゃ。金が要るなら、わしが出してもよい。その代り、あんこと、忘れんでくれよ」

一等禰宜 「おゝ金を出してくれるなら大丈夫だ。あの事はな、大船に乗った気でおれ、間違いないわ」

奴隷頭 「はあ安心したわ。あの宝庫、中のたった一つ、その中のまたちよっぴつと、

出してくれゝば、あんたも大金持というものじゃ。頼みますぞ」

一等禰宜 「よし心得とる。どんなものか、見ておれ」

イアドモン 「万に一、失敗してもな、何時か話したが、あんたは、わしが引受けるでな、

安心さつしやれ。あんた一人や二人養つたとて、ぶきともしない大世帯じゃ」

一等禰宜 「ああよう判つとるわ。それ聞いたからやる気になったのじゃ。彼処にはな、大昔から、溜まりに溜まった世界中の秘密が、あるわあるわ、わんさか詰め込まれとる」

イアドモン 「おゝ、聞くだけで、ぞくぞくする。わしやな、世界中股にかけて商売してきたが、もう、んな当り前の仕事、飽きがきたんだ。何かこう、度胆ぬくようなこと。今度は不足がない。あんたわしに、よい仕事を与えてくれたわ。感謝しとるぞ。あんたにもきつと大儲けさすからな。こゝどんと氣ばつて、生命がけでやんなよ」

一等禰宜 「おゝ、委かしとけ」

胸を、どんと叩く、

奴隷頭 「それ、その意気。あわつはゝ」

三人、大声で笑い合う。

イアドモン 「さて、前祝いじゃ。競技場で、一ぱいやつてくつか」

奴隷頭 「じゃ禰宜さん、またな。他人の酒で、やってくるわ」

イアドモンと奴隷頭、競技場へ降る。

入替り判断人二人、坂を上ってくる。

●その時、アイドン小屋掛の中で争い事、

巡礼に化けた判断人3、イソツプを掛小屋から引き摺りだす。先の判断人二人が加勢、この三人でイソツプを締める。

イソップ 「なんだ、何しやがる」

アイドロン、小屋から飛び出て中に入る、

アイドロン 「また、手荒なことをするか、たゞでは許さんぞ」

判断人3 「やい、おまえ、さつき言ったこと、御神殿の前で、もう一度言ってみろ。

先刻、判断はしていないと言いおったが、イソップ、お前、御神託を扱って
いたでないか」

イソップ 「何が言いたい。お前さん、巡礼じゃないのか」

判断人3、巡礼姿の被りものを取り去って、

判断人3 「ほりや。わしはこゝの判断人よ。判ったか」

イソップ 「見覚えがないが、うん？こゝの判断人さんか。いったい、わしに何用？」

判断人3 「とぼけるない、さつき、お前が言ったこと、もう一度こゝで言ってみると
いつているんじゃ」

イソップ 「ああ？あれか。しかし、それを言うて何になる」

判断人3 「用があるから、言えいうとる」

イソップ 「そっちに用があっても、こっちに用がないわい」

判断人3 「あんだ、言えないか。このくそ！大カタリめ！」

イソップ 「んじゃ？カタリ？わしはカタリなどではないわ！正しいから、正しいと、
言ったまですよ」

判断人1 「まあ、お互い一寸待って。イソップさん、わし達みんな判断人じゃ。で、
あんたの判断、後日の参考に訊きたい。どう、話してくれまいか、な？」

アイドロン 「そんなことなら、何も手荒く。引き摺りださんでも、よいではないか」

判断人2 「悪かった、謝る。なあ、話してくれんか、のう？」

イソップ 「あゝ、いゝんだ。いくらでも話してやる。代りに、掛小屋へなぐり込みか
けたり、手荒な真似。このアイドロンさんに申し訳ないから、勘弁してくれ」

判断人2 「あゝ、それはよう判った。手荒なこと、今後、一切せん」

イソップ 「よし、それなら話そう。ああ、そもそも……」

判断人3 「ああ、そもそもじゃと、勿体ぶるな、おのれ」

それを制し、

判断人1 「お前だまれ！茶々入れたら話しにくい。なあイソップさん、大祝賀会はも
う始つとる。わしらも早いとこ、いかにやと謂うか、行きたい。話しとくれ」

イソツプ 「分りました。このフォキス・ポリスの皆々様、ご承知の通り、アーリアン

民族さんでございませう。氏神様のアポロン大神を奉じまして、北西からこの地へと、お越しなさいました。当然ながら先住民は、大戦で追っ払われ、奴隷となったり、エーゲの島へ散り散りに逃げ渡りました。先住民が奉じた氏神は、大地の母神、大蛇神ピュートーンを標章としており、今はあの御神殿の下、大地の割れ目に封じ込められております。これも皆さま、よく御承知のはず。巫女様がお告げを授かる時は、この大地の割れ目の上に三脚壇を置き、拝受すると伺っております。その御神託は先住民の言葉でございます。こゝですじゃ。このあたりのお方には、その言葉が判らない。判らないから、時に判断を間違うこともございますじゃ」

判断人3 「なに！間違うことがあるとな」

イソツプ 「いえいえ、母国語がどちらかと謂うお話にて。お腹立ちなさいませんよう」
 (判断人たち、次ぎを話させようと堪える)

イソツプ 「わたくし、エーゲ東南端ロードの生れ、巫女様のお言葉が、よく判るのでございます。巫女様のお言葉は、故郷の言葉と同じでございます。だから、間違いつこなしで、正しいのでございます」

判断人一同、なる程、そうだったかという思い入れあり。だが、今の場合、そうもしておれぬので、虚勢にて、

判断人3 「よし、よく申しおった、それに間違いあるまいな」

イソツプ 「はい、間違いございません。『たちまちにして、大地母神の声、知恵ある言葉を発す』と、昔の本にも書いてありますじゃ」

アイドン 「イソツプさんの申す通り、巫女様のお言葉、このイソツプさんの故郷の言葉と同じでございますから、それはそれは、この男に、よく判るのでございます。皆さまにも、どうぞご了承を」

判断人一同 「……………」

●その時、一等禰宜、あたりを見廻し、石段を降りる。

@一層うす暗く^{7/8}、営火が燃えだす。うつすら空に反映する。

酒宴のどよめきが流れてくる。

一等禰宜 「すると、御神託は、先住民のお告げとでも、申すのか」

イソツプ 「おゝ、一等禰宜様、よいところに、どうぞお助けを。只今、先日、禰宜様

にお伺いした通りの事を、申したのでございます」

一等禰宜 「あに？今までお前と、一度として口きいたことなどないわ、余計なこと。聞くことだけに答える」

イソツプ、不満げ、

イソツプ 「は、はい」

一等禰宜 「さすると、デルフィの御神託は、先住民の氏神、大地の蛇神、とやらから出ていると、申すのであるか」

イソツプ 「いかにもでございます。そうおっしゃった」

一等禰宜 「なにいらざること。お前になど、会ったことないわ。おのれの生命にかゝわることぞ。よく考えて、返答いたせ。御神託を発するは如何に。大地の蛇神から出るか？」

イソツプ、奮然と、

イソツプ 「しかと、その通りにござる」

一等禰宜 「たわけ！お前の氏神、蛇神がお告げを発するか。御神殿の祭神はアポロン大神なるぞ。お前は、血塗れた御神託を、異教徒の判断をばら撒いておる。

許されると思っておるか。これ一つを以って、死に値するぞ」

イソツプ 「はあ、あーっ！」

気付き、躰を震わす、

一等禰宜 「デルフィ神殿の御神託は、どこまでも、御祭神アポロン大神から出るお告げなるぞ。それをあろうことか、『大地母神の声、知恵ある言葉を発す』など、異教の神から出たように申しおる。御祭神アポロン大神を、冒流する奴めつ、その罪や、如何なるものか、知っておるのか。その罪や、無限、神罰たちまちに至って、死なるぞ。我がデルフィ神殿の御神託は、うだいうがい宇内宇外に轟き渡る誉輝く御神託。国々より、その命運をかけ、人々は己の生命を賭し、お伺いに参る。心願に応うる、決死の御神託なるぞ。

その理を、判らぬとは謂わさん。異教徒の判断が一つ。第二は、デルフィ御祭神、アポロン大神を冒流の罪。第三は、御神託そのものを冒流したる罪。

あの此処な大ばかもめつ、そこを動くな、覚悟しおれっ！」

イソツプとアイドン、まっ青、震え大地に手をつき平伏す。

一等禰宜、言い捨て、足取り荒く社務所へ急ぐ。

アイドン、世にも哀れな態。イソップにとり継る。

アイドン 「イソップさん、どうしよう、どうしよう」

イソップ、やがて覚悟を決める。

判断人達は、少し離れたところにすくみ、声を発せず。

@さらにうす暗く^{6/8}、営火が空を薄気味悪い色にする。

●一等禰宜、衛兵三人を従え、御神託の入った小函を抱え戻る。石壇の上に立ち、

一等禰宜 「たゞ今、御神託をお受けして参った。謹んで、お受けするがよい。

『御神託』

【中正方成道】

中正^{ちゆうせい}まさに道なすにあり

【姦邪恐惹愆】

姦邪^{かんじや}なる悪人出でて大事を引き起す

【壺中盛毒菓】

壺の中に毒菓を盛るが如し

【非人去切断】

非人切つて捨て去れ^ㇿ

非人切つて捨て去れ、御神託を以つて、非人を処刑するものなり、以上。
終りっ」

大声で読みあげ、衛兵二人に目くばせ、

一等禰宜 「奴隷墓地へ曳き立て、槍処刑と致せつ、行けえっ！」

衛兵二人、うむを言わず、イソップを曳き立て、下手参道を降る。

○アイドン後追い、足が萎え崩れ倒れる。起上るもへたり坐る。

アイドン 「悪かった許してくれ、わしが誘いさえしなかったらこんなこと、ああ……

あゝあゝ」

(アイドン、合掌)

アイドン 「南無喝囉怛那、南無喝囉怛那、南無喝囉怛那……」

判断人三人は、成りゆきに混迷、怯え立ちすくむ。

@営火の光り^{5/8}が空を染め、凄愴^{せいそう}な気。

●一等禰宜、うす笑いを浮かべ、

一等禰宜 「奴隷の一人や二人、あ奴つ、知恵は深いが、知恵まけしおった」

(判断人三人に向い)

一等禰宜 「お前達、望み通りよのう。御神殿の権威を傷付けるものは、極刑。御神託がその通りに現われる、万事が万事、不思議なものよなあ。お前達、もう用あるまい。競技場で聖餐に預り、大いに祝酒でも飲んでくるがよい。行けっ」

判断人三人、頷ぎ合い、思いを残しつ、早々に上手の小路を下る。

○一等禰宜、いま一人の衛兵に向い、何か命令。衛兵、走って社務所に入り、大きな紙と金袋を持ち帰る。一等禰宜に、金袋を渡す。大きな紙を石段下の掲示板に貼り付け、社務所へ消える。

掲示板の紙は、次ぎの様、

『布告

御神託により、奴隸イソップを処断するものなり。

依って、右奴隸の所有者は、申出でて、補償金を受取られたし。

デルファイ神殿社務所
』

@さらに暗く、夜空だけ光り^{4/8}、薄気味悪さ色濃く。

●上手競技場からの路、イアドモンと奴隸頭、祝酒の勢いで、ふらふら登る。ふっと、不審顔を見まわす。

イアドモン、一等禰宜に気付く。

イアドモン 「なんじゃ、禰宜さん、んな処独りで、おゝおわ、背筋が寒うなった。ぶるぶるぶる……」

奴隸頭は千鳥。掲示板の文字をすかし、他人ごとに読む。

奴隸頭 「なんじゃ。ごしんたく、うむん、イソップを処断、する、とな。うわっ、はっは、何を書いていることやら」

イアドモン、掲示板へ近寄る、

イアドモン 「なるほど、あまでよ、イソップをしよだん……か。なるほど、あ？までよ、イソップ、イソップ、どっかで聞いたような名前じゃな」

一等禰宜 「慌てずと、よう読め！」

イアドモンと奴隸頭、何度も透かし繰返し、

奴隸頭 「あれっ、親方うちの奴隸。補、償、金！」

イアドモン 「おやま、補償金。補償金を受取れたあ……ん？禰宜さん、こりやどういことじゃ。何かあったんかいな」

一等禰宜 「何があるうと、お前達は、知らんでもよいことだ」

奴隷頭 「なあるほど。左様か。わしらは知らんでもよい、知らんでも、よいことけ。

知らぬが仏かいな。なんだか背筋が、寒うなる。ぶるぶるぶる……」

一等禰宜 「不敬事件があつてな、奴を処断したのだ。あのたわけ奴隷め、まだ、腹が立ってならぬわ」

奴隷頭 「へい、お腹が、立ちます。お腹立ちい、ああ、お腹立ちいと、きやがつたかあの、さいさいさいのさあー」

(しまい節がつき、酩酊の態。掲示板を見て)

奴隷頭 「おつ、待った、親方、なんと補償金ですぞ」

イアドモン 「他人の奴隷処刑して、補償金出さなかったら、大カタリじゃ。禰宜さん、その補償金、なんぼじや？」

一等禰宜 「待った。あれは今のところ、主人はなかった筈だよ」

イアドモン 「おとぼけでないぞ、禰宜さん。あいつは、わしのもんよ。今更言わんでも判つとろが」

一等禰宜 「以前はね。確かにお前のものだったよ。だが、あの奴隷が脚を折った時、お前は、捨てたではないか。二日も飯を喰わせず、医者にもかけず、可哀そうに。おまけに野晒しにしておったよ。お前のやり方は、人並み以上よ。そうそう真似できないね」

イアドモン 「ん？まあそれは、禰宜さんも同じこと。で、今の話違うぜ。あれは捨て、ないさ。ロードーピスに貸してやったんさ」

一等禰宜 「さようか。それなら貸料を取ればよいだろ。ところ、医者よ薬よ、毎日の喰わせ賃、それを差っ引いたら、あべこべに、あんたが、不足分を出さねばなるまいて」

奴隷頭 「せいじゃ、その不足分を、ちよい払ってやればよい。ところで禰宜さん、その補償金とはいくらだ。ん？いくら、いたゞけるんで、す、か、なああ」

一等禰宜 「阿呆！呂律も廻らん奴はひっこんどれ。おいイアドモン、話が判るだろう。どうだ、山分け、といくか」

イアドモン 「山分けですか、そりや面白い。大事の前の小事じゃ。こゝん所は禰宜さんに花を持たせにやらんし。よしや、手を打とう。ところで補償金、補償金とやらは、幾何いかにですかな？」

一等禰宜 「補償金、補償金と、そう吠えるない。捨てた奴から、いくら入つてもよい

でないか。一百ドラグマだわ。よいか山分けだからその半分だぞ、五〇ドラグマづゝだ。よいか」

イアドモン 「おつよしっ、さあよこせ。醜い穢え、あんな役に立たん奴が、五〇とは、儲けものよ。元たゞせば、あいつは、一山三〇ドラグマ。一山あれ？十人位だったよな。てえと一匹三ドラグマ。五十から三を引くと、あれ、いくら？おゝ、四十七じゃ。四十七ドラグマか。こりや大儲け。うわっはゝゝ……」

奴隷頭 「どうも背筋が、時々寒うなる。ぶるぶる、ぶるぶる。親方、大儲けだよ。一文にもならん奴が。あ奴め、何しでかしたか知らんが、死刑にまでなつて親方を大儲けさすとは、よい心掛けじゃ。うう南無阿弥陀仏なんまんだぶ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

イアドモン 「その通り、見上げた奴よ。親方孝行ちゆうもんじゃ。奴隷の一匹や二匹。あつ、おい禰宜さん、ついでに何でもいゝから他の奴隷死刑にしてくれよ。そんで、補償金たんまり取ってくれんか。そのが儲かりそうじゃ」

一等禰宜 「このくそ業突く！そう、むやみやたら吠えるな。大儲けしたではないか。念仏でも唱えてやれ」

イアドモン 「ふん、念仏は嫌いじゃ。念仏する暇あつたら金の算段しとるわい。おお、禰宜さん、金よこせ」

一等禰宜、黙って金袋から五〇ドラグマを数えて取出し、イアドモンに渡す。残りは金袋のまゝ自分の懐中に納める。

一等禰宜 「大儲けさしてやったんだ、奴の食扶ちと薬代は、お前が、そこにいる運勢占屋に払え」

イアドモン 「はあ？こゝまでケチ、口が……ああようもまあ。禰宜さんの方が、役者が一枚上つつうことか。なにか背筋が寒うていかん。ぶるぶるぶる……」

○イアドモン、銭一枚を奴隷頭に渡し、顎で指図。奴隷頭、掛小屋前にしゃがむ占屋に近寄り、銭を遣ろうとする。アイドン、首を振り受取らない。

奴隷頭 「こ奴っ、せっかくの金を受取らぬと？ほう、金の要らぬお人もいるらしい。こりやまた、奇特なことじゃ。要らぬなら、やらんわい。わしが貰つとくぞ」

イアドモン 「そいじゃ同志、金さえ貰えば用はなし。あばよつ。と、待った、禰宜さん。わしら明後日の朝方に船出す。あんた、明日の晩、船まで来られぬか。一杯やつて、件のこと、相談したいで」

一等禰宜 「明後日か。では明晩いくとするか。よく練っておこう。おい足許に気をつ

けて戻れよ。それ、あぶないぞ」

イアドモンと奴隷頭、また、ぶるぶる震えながら、千鳥で参道を下る。

@益々暗く、營火の反映も、次第に弱く^{3/8}、

●ロドーピス、上手の小路より、忘れものをした様子で戻る。凄惨な気に怯え見廻す。

一等禰宜に気付き一寸震え、お辞儀をし、天幕へ入る。薄く透き通る絹の比礼^{ひれ}を三枚持ち出す。

と、アイドンがうづくまるを認め、駈け寄る。

ロドーピス 「どうされた？こんな遅くに！お病気でも？」

アイドン 「イソツプが神罰をこうむったっ！」

ロドーピス 「な？イソツプが神罰？何あった！」

アイドン 「御神託で死刑っ」

ロドーピス 「何で、何処で？」

アイドン 「御神殿、御祭神……ここ、今、槍処け、う……」

●ピユテイアが社務所から跳び出す。衛兵三人が従い執政長官、執事長と続き慌しい。ピユテイア、石壇上から、

ピユテイア 「只今そちの発した御神託、いずれより出たっ！此方^{こなた}の手を経ない御神託は、全て偽りなりっ！」

(衛兵に向い)

ピユテイア 「一刻も早く、奴隷墓地へ逃げ。イソツプの刑執行を停止して参れ。逃げ！急がぬと間に合わぬぞっ！」

衛兵二人、石段を跳び、下手参道へ駈け込む。衛兵一人が禰宜に槍の切先を向ける。

執政長官、石壇上より、

執政長官 「禰宜、直れっ！只今に於いて、国外追放と処す。一つ、偽りの神託を発したる罪。二つ、偽神託を持ち死刑を処したる罪。三つ、公金を持出したる罪。

抗弁は許さん」

ピユテイア 「罪なき者に、偽りの神託を以って、死を与うるは、如何なる理を以つても、非道の所業！見損なっておったわ」

一等禰宜 「あ奴は異教徒よ。異教徒の分際で御神託を扱い、且つ、我が大神アポロン

祭神を冒瀆……」

執政長官 「御祭神、御神託の冒瀆など当方の裁量。お前の権限に無い！何を不埒な。

直ちに去れ！」

一等禰宜 「国外追放？吠え面搔くな」

○アイドンとロドーピスが追いつく、

アイドン 「おい待て」

(二人を睨み据える禰宜)

アイドン 「ニセ神託？」

一等禰宜 「知ったことか」

ロドーピス 「死に切れません」

一等禰宜 「神を冒瀆したからだ」

ロドーピス 「長官様から今、あなたに権限がないと、伺いました。どうして下さる！」

一等禰宜 「もう死んだろ、死んだ者をどうできる」

アイドン 「殺した上、補償金を半分懐へ入れたか、人非人！」

一等禰宜 「何でもほざけ、んな可哀そうなら、早よ刑場行け！今ならまだ間に合うか

知れんわ」

ロドーピスとアイドン一瞬迷い、禰宜がその隙に下手参道を海辺へ逃げる。

執政長官一行、それを一瞥、社務所へ引き上げる。

アイドン 「どうしよう」

ロドーピス 「おゝ」

@ 暫し空白。益々うす暗く^{2/8}、

● ロドーピスとアイドン、気遣わし気に待つ。幽かに、コトン、カタン、サーコトン、

カタン、サー木片を曳ぶる音、二人、不安に聴き耳を立てる。

イソップ、横腹を槍で一と突かれ血が滲む。片足に木の足枷がはまる。両脇を抱える

衛兵に降ろされ、二人が駆け寄る。

ロドーピス 「おゝおゝ……」

狼狽しながら、舞の比礼を一本、腹に巻きつける。

衛兵1 「執行柱に縛られて、一の槍は、間に合わなかった」

無念、切れぎれ、

衛兵2 「二の槍は、大声で止めたが……」

○衛兵二人、イソップを二人に託し、社務所へ報告に戻る。

ロドーピス 「御神託はニセよ！禰宜が、勝手に出した！あの禰宜、国外追放になった。

口惜しい」

イソップ、一寸顔を上げるが、頸が落ちる、

イソップ 「ニセ？」

アイドゥン 「ニセだ」

イソップ 「ニセ！」

イソップ、神殿へ向かおうと、立ち上がる。

イソップ 「誰れだ誰れが、ニセ神託を出したっ」

アイドゥン 「一等禰宜だ。あいつがニセ神託を出した」

イソップ 「禰宜?!」

(神殿へ向い、身を震わし)

イソップ 「ニセ神託で殺されるのか……」

(神殿へ向うとするを、二人が両脇から抱き止める)

イソップ 「禰宜、出てこいっ！」

ロドーピス 「その禰宜は国外追放だ。海へ降りていった！」

イソップ 「逃げおったか、逃げようとして、逃がすものか」

(海辺へ急ごうとするが、脚が纏れ、二人を巻き添えに倒れ込む)

イソップ 「逃がすか、逃がすものか」

起上る気力はなく、地に身を投げる、

ロドーピス 「口惜しい。でも、そのお躰では」

イソップ 「あかん」

(痙攣が始まり、顔に諦めの色)

イソップ 「ロドピスさん、あアイドゥンさん、お二人お世話っ、ご恩返しも、すまぬ」

二人手腕をとり、半身を引き起こすが、痙攣が止まない。

アイドゥン 「スイ・レンさんのように、幸せになれるかと思えば、イソップさんは……」

イソップ 「運が悪い。スイ・レンさま、お殿さま。よろしく、伝え下され。幸せにつ、

う痛っ……」

(引き攣り)

イソップ 「書きたい、ものが」

ロドーピス 「書くもの書いて！」

イソップ 「ロドピス！手」

ロドーピス 「手っ！握っている。こんな堅く」

イソップ 「握ってる？うう、わからん……」

アイドン 「この傷、何として！何とせうぞ」

イソップ片手つき、肩息、

イソップ 「生涯、侮蔑と忍苦、一条であった」

ロドーピス 「……」

朋輩の泪、深い、

イソップ 「それに耐えるに、小さな真理を、口にふくみ、舌の、舌の上で、転がして、

おった」

(衰弱進み、営火弱る^{1/8}。鬼気迫り、声微か)

イソップ 「お、わ、か、れ」

ロドーピス 「なにを！」

イソップ 「あ、有難う。ロドピス、舞、えっ、エジプトの舞」

ロドーピス 「えっ？ピラミット造ってた時の『金の甲冑』のこと？ねえ？あれでいい？

一世一代の舞よっ！」

●ロドーピス、長い二枚の比札をかざし、舞い始める。

@営火、少し明るく^{0/8}、夜空に反映る。舞姫の姿にも反映。静かな舞。

舞に、気を注ぐイソップ。暫らくしてロドーピス、舞の手を止め、イソップを瞞める。

ロドーピス 「しっかりっ！してっ」

イソップ 「紙、紙、紙……」

ロドーピス 「なに？か、み？」

○頷く。ロドーピス困惑。アイドンが掛小屋へ走り込み、紙を七、八枚持ってくる。

イソップ、手を動かす。

アイドン、梗^この木炭と、机代りの箱を持ち出し、前に置く。紙を乗せ、イソップの手に握らせる。

イソップ 「文字が消えぬよう、山羊の乳を吹きかけておくれ」

しきり書く。二枚目は、取上げる力もない。アイドンが、紙を取る。手が空を切る、

ロドーピス 「ホメロスを凌ぐ長編……」

二人瞠める。ロドーピス、眼前で手を振る。

木炭を引く。手から抜ける。尚も字を綴る。

ロドーピス、木炭を持ちすくむ。イソップの頸が前にのめる。

アイドン、鼻の下へ手を、

アイドン 「いき、してない」

臓に触れる、ロドーピス、

ロドーピス 「うご、いてない」

手が宙を舞う。

―後述―

その後、フォキスを疫病が襲う。詩歌の宴、ピュティア大祭を主宰するデルフィの人々は、イソップを清祓。幾多の寓話をイソップの詩作と賞賛し、安寧を得る。

ロドーピスは、シンデレラ物語『ロドーピスの靴』で美の象徴。イソップは、醜の詩人として、今を生きる。

―醜―

静かに幕―

- 一 『セイキロスの墓碑銘』↓紀元前二世紀頃。現代の楽譜に再現できている最古の楽曲の一つ。
 二 錫杖↓僧の携行杖。両端が金属で片方に複数の輪。しゃんしゃん音が鳴る、害獣除け兼防具。
 三 金剛輪↓舞衣に着けて、裾を纏める装飾を兼ねた金の輪。一部を解き、裾ごと振廻し使う。
 四 宮火↓所謂キャンプファイア、団結・結束の火。
 五 半ば向け左↓四十五度左を向く。
 六 嘉し給う↓よみしたもう・褒め称える。
 七 氣宇↓けう・きう・心もち・氣構え。
 八 冥加↓みようが・神仏の加護。
 九 アーリアン民族↓北西からの侵攻民族。ジュダヤに対（史実的にはドーリア人他多数）。
 十 宇内宇外↓天下天上・この世あの世（に有や否や）。
 十一 浅草寺観音御籤↓第四十・末小吉。『壺中盛妙薬』↓妙薬蓄え↓『壺中盛毒薬』↓毒薬蓄え、
 『非久去煩煎』↓煩い消え去る↓『非人去切断』↓非人切り去れ、へ改変。
 十二 南無喝囉怛那↓大悲心陀羅尼『南無喝囉怛那哆羅夜耶』の省略形。
 十三 硬↓やまにれ、芯の硬い真直ぐな枝。
 十四 疫病↓疫病を伴う『飢饉』で、神殿がイソップの清祓を命ずる神託を発したとされる。